

清代福建省における経済発展と貨幣流通

李 紅 梅

はじめに

経済発展の具体相は工業・農業・商品流通・消費形態・社会人口の職業構成などの方面から観察することができる。経済発展に伴い、各方面は貨幣流通との関係を必然的に強めてくる。周知のように、宋元時代から繁栄してきた福建は明清期に海外貿易市場の拡大により、自然経済的農業が商業的農業に発展し、東南沿海部の商品経済発達地域として知られた。特に、外国銀貨の流入・流出の窓口として、経済発展と貨幣流通の関係を分析する際、中国内においては特別な存在であったと思われる。

清代福建省における経済発展を課題とした研究はこれまで様々な側面から議論され、豊富な成果が得られている。福建の史学界では民間史料を重視した傅衣凌¹⁾を代表として、市場経済・商人と商業資本・農村組織と経済関係・土地制度の変遷などの研究が進められ、中国とヨーロッパの比較も重視して中国社会長期停滞説を否定した。経済発展と貨幣流通については「私人海上貿易の発達、特に銀貨の大量流入により、国内商品流通と交換及び沿海各地の商品化農業と手工業の発展がある程度促進された」と指摘した。近年、福建の地域発展史を論じた汪征魯は貨幣の変遷について「明清500年間余において、福建市

1) 傅衣凌『明清時代商人及び商業資本』人民出版社、1954年。『明清社会経済史論文集』人民出版社、1982年。『傅衣凌治史五十年文論』厦門大学出版社、(1989年版)、96頁。『明清社会経済変遷論』人民出版社、1989年、143頁。

場の主な貨幣は何度も変化した。明中期の主要な手段は銀で、その後、銅銭が鑄造されたが、鑄造量が商品流通の需要に応じられなかったため、清の雍正期まで銀が用いられた。土地契約文書から見ると、嘉慶・道光期に鑄造銅銭が市場流通でもっとも重要になった。明末清初外国貨幣が市場の流通手段として充てられた。」と明示した。²⁾ 周玉英³⁾は明清期福建経済契約文書を着実に分析した結果、福建市場で流通していた貨幣について三つの段階に分けた。すなわち、i. 明代から清代の乾隆期まで主要な貨幣は銀両であった。ii. 嘉慶道光年間銀両使用が減少したとともに銅銭使用が増加した。iii. 咸豊から清末まで、銅銭が主要な貨幣になっただけではなく、外国貨幣の使用が多くなった。そのほか、貨幣浸透の下で、福建における貨幣地租の展開が山地・園地などの郷族共有地や地主の土地で行なわれたと陳支平⁴⁾の研究より提示している。その外に、福建の食糧問題⁵⁾・手工業の発展⁶⁾・定期市⁷⁾・人口論⁸⁾などの研究も確実に進んでいる。

日本における福建地方社会を中心とした研究としては、まず三木聡⁹⁾が挙げられる。付加価値商品作物栽培の進展に伴って、米穀生産と流通をめぐる食糧問題や小作農の日常的抗租など明清福建農村社会を考察した。山本進¹⁰⁾は清代福建の商品生産と台湾米流通について究明し、福建（特に厦門）と台湾と江浙との商品流通ルートについての変化を論じた。二つの研究から福建は国内及び台湾との貿易関係がほぼ読めるようになるが、その貿易関係の流れの中、貨幣の浸透や流通状況について論じていないようである。「明代後期以降の海

2) 汪征魯『福建史綱』福建人民出版社、2003年、70 - 72頁。

3) 周玉英『明清時期福建経済契約文書研究』遠方出版社、1999年、341 - 391頁。

4) 陳支平「明清福建貨幣地租質論」『中国社会経済史研究』1990年第1期。

5) 王業鍵「十八世紀福建的食糧供需与糧價分析」『中国经济史研究』1987年第2期。

6) 曾玲『福建手工業發展史』厦門大学出版社、1995年。

7) 陳堅「明清福建農村市場試探」『中国社会経済史研究』1986年第4期。

8) 陳景盛『福建人口史論考』福建人民出版社、1991年。曹樹基『中国人口史（清時期）』復旦大学出版社、2001年。

9) 三木聡『明清福建農村社会の研究』北海道大学図書刊行会、2002年。

10) 山本進『清代の市場構造と経済政策』名古屋大学出版会、2002年、135 - 157頁。

外需要の増大が潜在的な生産力を実現させ、商品経済を発展させる牽引力となった」¹¹⁾ というように指摘した岸本美緒は福建が江南と比べられる地域として、よく特筆した。例えば、明末の田土価格の高騰を議論した時も銀流通を享受する福建海港地域の田土需要状況を注目し、不動産貨幣使用動向について論述した時も福建を考察した。ただ、南部沿海地域での経済発展と貨幣流通に関わって議論したが、福建全体像を考察する余地がまだあると思われる。

先述に汪征魯、周玉英は福建市場で流通貨幣の状況を提示したが、筆者は前稿¹²⁾で土地売券を利用して清代福建省の貨幣使用実態を考察した結果から見ると、地域ごとに貨幣使用が異なったことを注目したい。すなわち、18世紀後半から19世紀後半まで秤量銀両使用が次第に縮小したと同時に、計数貨幣である銅銭・銀元使用への転換が顕著になった。また、漳州府龍溪県のような南部地域では銀元使用が強かった一方、東部と北部地域では銅銭使用が多く見られる。そして、銅銭使用が乾隆中期から増加し、嘉慶道光期までピークになった。

この出発点から、いくつ疑問点がまた出ている。漳州府龍溪県の外国貨幣を使用した件数が確かに多かったが、乾隆期中期までの100年間外国貨幣が土地取引でなぜ使用されなかったか。清代中期から商品経済の発展に伴い、貨幣流通市場に計数貨幣の需要がもっとも高まった中で、福建から外国貨幣が使用され始めたというイメージが強かった。しかし、銀流通を享受する福建海港地域といっても、南部泉州府・漳州府の土地取引で外国銀元が多く使用されたものの、東部福州府では銀元使用ではなく銅銭使用が頻繁になったと見られる。このような貨幣使用の差異はなぜ形成したのであるか。福建経済地域圏において各地域の商品経済発展格差は当地の貨幣流通市場にどのような影響を与えたの

11) 岸本美緒『清代中国の物価と経済変動』研文出版、1997年、234 - 235、262 - 3、359 - 361頁。

12) 拙稿「清代における福建省の貨幣使用実態——土地売券類を中心として」『松山大学論集』18 - 3、2006年8月、166頁。

であるか。本稿は上記の先行研究の具体成果を踏まえつつ、人口・耕地・田賦の変化や商品作物・手工業・定期市の発展及び海外貿易の影響などの側面から福建各府県の経済発展趨勢と格差を考察したい。それで、地域別民間市場に貨幣流通状況を把握し、土地売券からみた貨幣使用実態の形成要因を解明する目的である。

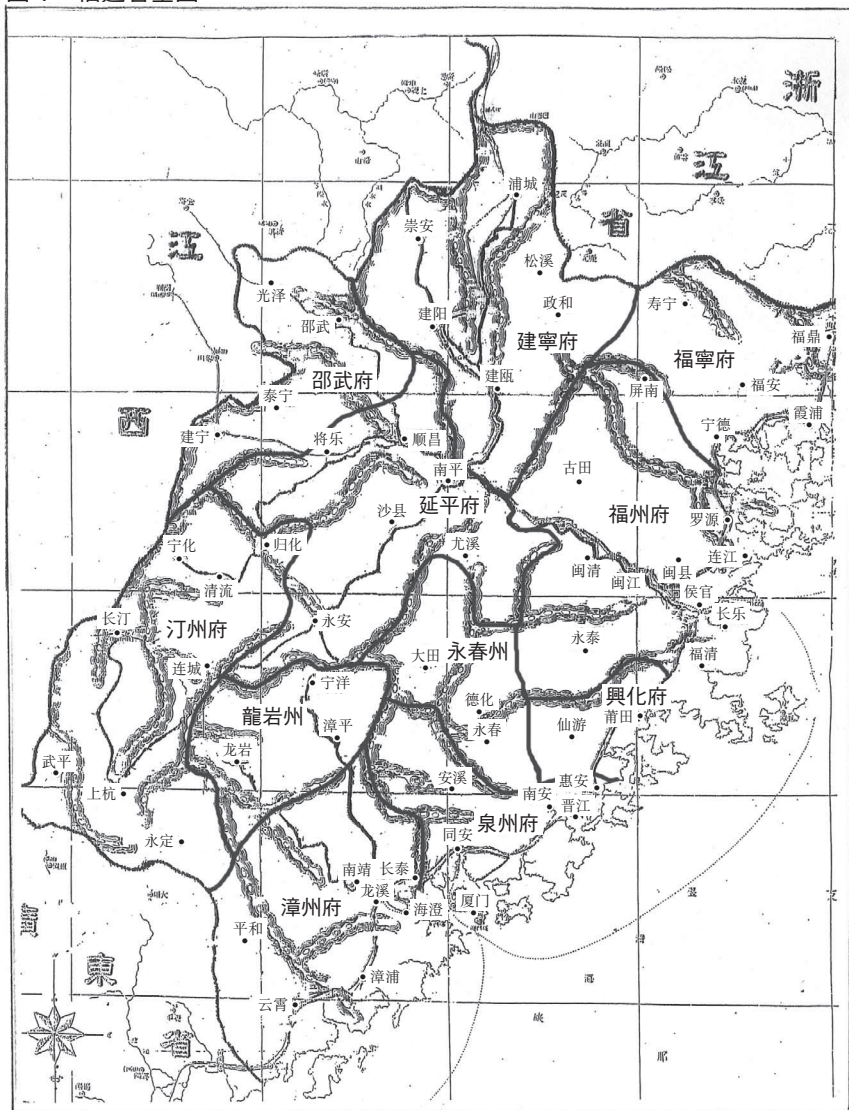
清代福建省内において10府2州を含めた。分かりやすく考察するために、いくつかの地域を区分している。筆者は閩北（建寧府・昭武府・延平府）、閩東（福寧府・福州府）、閩西（汀州府）、閩中（興化府）、閩南（漳州府・泉州府・龍岩州・永春州）というように、前稿では5つに分かれたが、先行研究の成果を参考にした上で4つに修正したい。

すなわち、図1のように、北部（昭武府・延平府・建寧府）、東部（福寧府・福州府）、西部（汀州府・龍岩州）、南部（漳州府・泉州府・興化府・永春州・台湾府）というように分けた。その理由として：①福州府は省都という中心都市の役割を果たさず、省内において地理的にいくつかの地域が形成された。地図から分かるように、福建全域が山脈によって分断され、閩江・九竜江・晋江・汀江という主要江河に沿って複数の独立した水系を形成している。山脈と河川の間の狭い盆地はそれぞれ行政的な県の所在地であり、その下にまた、それぞれの支流の周囲に郷・都が形成されている。②平均海拔500メートル以上の山脈の分断より、福建内で使用された言葉（俗称閩語）は閩江流域と九竜江・晋江流域の言葉が通じないほど大きく異なっていた。昭武県・建陽県が閩北方言区に、古田県が閩東方言区に、仙游県・詔安県・台湾府が閩南方言区にそれぞれ属していることになる。¹³⁾ ③後述するように、重要な食糧貿易に関わっていた商品流通ルートについての研究成果が取り上げられる。王業鍵¹⁴⁾は南区（漳州府・泉州府の食糧が台湾府から供給された）、閩江流域（上流の

13) 『問俗録』（清）鄧伝安・陳盛韶著、（標点本）書目文獻出版社、1983年；訳注者：小島晋治・上田信・栗原純、平凡社、1988年、204 - 5頁。

14) 前掲王業鍵、85頁。

図1 福建省全図



出所：『支那省別全誌』第十四卷 福建省の全省図より作成した。

昭武府・延平府・建寧府は福州府に食糧を提供し、龍岩州・永春州は自供できる)、西区(汀州府は江西省から購入した。)の三つの主要な市場区を整理した。三木聡は「福建の米穀流通を中心として三つの経済圏を設定してきたが、それらは①. 産米地=昭武府・延平府・建寧府三府および非産米地=汀州府の一部と米穀消費地=とからなる区域、②. 興化・漳州・泉州三府からなる区域、③. 汀州府を結節点として江西・広東の一部からなる区域であった。」¹⁵⁾ というように分析した。この二つ見解を参考しながら、汀州府と龍岩州は汀漳龍道(福建省内の地方管理機関)に管轄されたことも考量した上で、以上の4つの地域に分けた。

第1節 経済発展の趨勢と地域差

1. 人口の推移と経済的な要因の移動

清代福建において人口数量の史料源として『戸部彙題各省民数穀数清冊』、『清朝文献通考』、嘉慶『大清一統志』、道光『福建通志』、地方志などが挙げられる。これらの史料の下で、梁方仲氏¹⁶⁾の『中国歴代戸口・田地・田賦統計』に各省府の人口・密度・耕地面積・田賦などがまとめられ、嚴中平¹⁷⁾の「清代乾・嘉・道・咸・同・光六朝人口統計表」に各省の年度別人口数の統計がある。この二つの資料集を利用しながら、各時期の地方志のデータを加え、陳景盛¹⁸⁾は福建省内の各県レベルまで歴代人口の統計を整理した。しかし、これらの史料には後述するように、数字の書き間違いや時期別人口増加比率の不統一などの疑問点もある。データを引用する際、確実性を検討する必要がある。

15) 前掲三木聡、94頁。

16) 梁方仲編著『中国歴代戸口・田地・田賦統計』上海人民出版社、1980年。

17) 嚴中平等編『中国近代経済史統計資料選輯』科学出版社、1974年。

18) 前掲陳景盛。

表1 清代中期福建の府州別人口統計

地区	府州	18世紀 50年代*1	1776年*2	1820年*3	1829年*4	1865年*2	1910年*2
分布		人口(万人)	人口(万人)	人口(万人)	人口(万人)	人口(万人)	人口(万人)
閩東	福寧府	37~41	63.2	76.3	79.3	93.2	102.0
	福州府	126~140	237.2	259	270.7	232.2	254.0
	合計	163~181	300.4	335.3	350	325.4	356.0
閩北	建寧府	152~169	112.5	322.8	325	64.8	70.8
	邵武府	31~34	60.3	63.8	64.6	22.8	25.0
	延平府	41~45	78.1	85.3	86.9	54.9	60.0
	合計	224~248	250.9	471.9	476.5	142.5	155.8
閩西	汀州府	72~80	126.5	149.5	154.7	101.6	109.0
	龍岩州	16~18	28.3	33.2	34.3	22.2	22.8
	合計	88~98	154.8	182.7	189	123.8	131.8
閩南	泉州府	118~131	211.8	244.9	252.2	230.8	254.3
	漳州府	168~187	285	339.8	360.4	159.6	176.1
	興化府	26~29	44.5	53.1	56.2	97.2	106.4
	永春州	23~26	40.5	48.3	50.6	37.0	40.5
	合計	335~373	581.8	686.1	719.4	524.6	577.3
	台湾府	91~101	90	178.7			
総計		900~1000	1287.9	1475.8			
		762*5	1280.9*6	1606.7*6	1733.9*4	1934.7*6	1700*7

出所：*1 王業鍵「十八世紀福建的食糧供需与糧価分析」の表1より。

*2 1776年のデータは曹樹基『中国人口史（清時期）』表5-12より、1865年と1910年のは表11-11より。

*3 嘉慶『大清一統志』。

*4 道光『福建通志』巻48 戸口。

*5 梁方仲『中国歴代戸口・田地・田賦統計』甲表78 乾隆14年（1749年）のデータより。

*6 嚴中等編『中国近代経済史統計資料選輯』362頁1786年；363頁1820年；369頁1865年のデータより。

*7 陳景盛『福建歴代人口論考』110頁1909年のデータより。

表1は先行研究と官撰史料のデータを合わせてまとめたものである。福建各府州の人口数は清代初期から全部残したものではなかった。ただ、嘉慶期の

1820年と道光期の1829年の人口データは完全に残されたので、よく利用されている。王業鍵氏¹⁹⁾は福建の食糧供給と糧価を分析した時に『福建通志』の1829年のデータが正確に近いと判断して、18世紀50年代の府単位の人口を推定した。近年、曹樹基²⁰⁾官撰史料より1776～1850年間と1953年のデータが正しかったという何炳棣²¹⁾の論点を同意した上で、地方志のデータを参考にしながら、1820年の人口数を基として、清代中期～民国期の府県まで人口数量の推移を改めて修正した。王業鍵が推測した1750年前後の人口数は曹樹基の分析した1776年の人口数と比べると、建寧府以外低く予測した。1865年のデータについて曹樹基は太平天国戦争の影響がもっとも深かった汀州府・漳州府、北部の3府と龍岩州に人口の減少を考量した上で計算した。1910年のデータについては人口の低成長の中にそれぞれの府県の増加率より整理した。

筆者は福建省各府県の地方志から人口データを判明するかぎり収集してみた。嘉慶期の1820年と道光期の1829年の人口データ以外に、同じ年代の各府県の人口統計を揃うことが極めて難しいである。例えば、表2のように、乾隆期といっても、乾隆16年(1751年)の福州府と乾隆26年(1761年)の泉州府の人口数しかないが、10年の差がある。また、表2と表1を合せて見れば、福州府の合計(203750人)は18世紀50年代の126～140万人より1776年の237.2万人に近いと見られる。したがって、1776年の人口数はつぎの「福建府別田地・田賦(乾隆期)」中で利用したい。

各府県の人口変化を見ると、東部の福寧府と福州府では人口が自然に増加していった。すなわち、戦争・自然災害の影響が少なかったので、人口流動の可能性が低かったと言えよう。北部の建寧府の人口数が表1から分かるように、ほかの県よりあまり多かったと曹樹基²²⁾は判断し、1865年のデータを大分修

19) 前掲王業鍵、72頁。

20) 前掲曹樹基、172 - 188頁。

21) 何炳棣『1368 - 1953年中国人口研究』葛劍雄訳、上海古籍出版社、1989年版。

22) 前掲曹樹基、178 - 9頁。

正した。また、北部の3府、西部の汀州府の人口数は戦争・病気の影響で、人口の倍以上が減った。その中には他省に移出した可能性が十分に考えられる。南部では泉州府の人口変化があまり見られなく、戦地となった漳州府の人口減少は当然であった。しかし、1865年～1910年までの南部の低成長は海外・台湾への移民と関連が十分にあると思われる。

表2 乾隆期人口数

府州	県名	人口(1751年)*1
福州府	閩 県	45344
	侯 官	38067
	長 楽	32126
	福 清	37043
	連 江	15440
	羅 源	6369
	古 田	13819
	屏 南	6073
	閩 清	5149
	永 福	4320
	合計	203750
府州	県名	人口(1761年)*2
泉州府	晋 江	43727
	南 安	23989
	惠 安	14226
	同 安	55921
	安 溪	11691
	合計	149554

出所：*1 『乾隆福州府志』巻10 田賦上

*2 『乾隆泉州府志』巻18 戸口

不完全な統計によると、1840年代前後まで東南アジアの華僑総数は100万人以上に上り、福建出身者が多数を占めている。1847～1874年の30年間に25～50万福建人が出国したと予想される。戴一峰²³⁾による各年度海関『関冊』

23) 戴一峰『華僑華人歴史研究』1988年第2期36-37頁。

の検討では、1841～1910年間出国人数が2,702,503で、帰国人数が1,596,187であった。これは厦門港に限定されていたが、福州及び広東などからの出国人数を加えると、平均年間出国人数は10万人を超えたと言われている。また、周知のように、台湾の漢族の先祖は半分以上南部から来た人々である。記録によれば、嘉慶14年（1809年）に漳州人が42,500余で、泉州人が250余で、合わせて半分を占めたという。²⁴⁾

陳鏗²⁵⁾の研究により福建の人口移動が遷海令や太平天国戦争のような要因で生じたのではなく、生活を維持するための経済的要因によるものであることが明らかになった。商品作物の生産から利益を獲得するために、各省や各県の間で移動したことが挙げられる。建寧・寧化から江西省に、寿寧から浙江省に、藍・麻・蔗の生産に従事するために人々が移動している。そのかわりに、江西・浙江からきた人々は「棚民」と呼ばれ、北部の延平・建陽各府の山を借り、製茶・製紙・製鉄に従事した。省内における府県間の人口移動の主流は汀州府・漳州府・泉州府・永春州から土地が肥沃な北部各府に移動したほか、漳州府から西部の各府に移入したといわれる。

表3の1820年各府の人口密度と1829年統計したにおける移入人口を比較すると、密度中位ぐらいの東部2府は移入人口比率が多かったが、人口密度/平方キロが300人以上を越えた漳州府・泉州府の流寓人口比例がゼロに近いほど少なかったことがわかる。南部各県の人口圧力を解消するために、西部・北部の各県や台湾に移動する可能性が十分高いと予想される。

24) 『皇朝統文獻通考』卷三〇、516頁。

25) 陳鏗「明清福建人口の経済性遷移」『人口与経済』1985年第2期。

表3 1820年代福建各府州人口密度と移動

地域分布	府州	嘉慶25年(1820年)			道光9年(1829年)		
		人口	面積 (平方キロ)	密度	人口	流寓 (移動人口)	比率(%)
閩東部	福寧府	751,660	9,000	83.52	793,378	131,006	16.5
	福州府	2,476,193	15,000	165.08	2,706,645	468,802	17.3
閩北部	建寧府	3,193,410	14,400	221.76	3,250,301	98,487	3
	邵武府	630,997	9,000	70.11	646,017	4,396	0.7
	延平府	853,347	14,400	59.26	868,869	47,922	5.5
閩南部	泉州府	2,381,429	7,500	317.52	2,521,684	—	—
	漳州府	3,336,729	10,200	327.13	3,604,171	19,166	0.5
	興化府	493,433	3,900	126.52	562,172	17,355	3.1
	永春州	389,948	5,100	76.46	506,258	14,009	2.8
閩西部	台湾府	1,786,883	35,400	50.47			
	汀州府	1,485,903	17,400	85.4	1,546,984	48,722	3.2
	龍岩州	328,419	7,200	45.61	342,886	29,644	8.6

出所：梁方仲『中国歴代戸口、田地、田賦統計』甲表88、277頁、附表37より。

2. 納税と食糧の流通

清代初期全国統一後、社会と財政の安定を維持するために、賦税制度は明代を継承しながら、新しい税制が進んでいった。康熙52年(1713)に「盛世滋生人丁」という制度を実施した。清代の制度において、16歳から59歳の成年男子は丁銀が課せられ、人丁と呼ばれた。康熙50年に登録された全国の人丁の総数を基準にし、丁銀を納める。康熙51年に16歳になった男子は当面課税対象として登録したが、60歳になる男性が丁の枠から削除されるまで免除される。それで、男子を生まれると、隠すことや逃げることを減少し、丁銀額を固定した。その後、雍正期土地を持たない貧民の負担を減少するために、丁銀を土地税に繰り込んで納める方法が全国で実行された。それで、貢納物と労役という2種の賦税が田賦の形に変わり、地丁銀といわれる税制が成立された。福建において明代まで別々に徴収した官田と民田の税を合せて、1畝

当り米6升を徴収した。付加税²⁶⁾を入れて、銀に折納すると、1石税米が約銀1.3両に、1人丁が0.28両になった。清代の賦役改革は清代中期まで人口が急成長した一つの原因になったのであろう。ただし、実際の徴収額は地方官吏の不正行為で田賦正額の数倍に昇っていたことがしばしば見られた。

地方官吏の報告と調査が不可信のため、官撰史料のデータはそのままでは実際が分からない。しかし、当時の経済データを得ることは困難であるので、『福建通志』と地方志のデータを示すかぎり、福建の各地域の様子を明らかにしたい。表4には府県別田地と田賦の推移をまとめているが、利用できるデータが限られていたので、無理に合わせたものがある。乾隆期の表4-1では乾隆29年(1764)に記載された田賦と乾隆41(1776)年の人口を仮にリンクしてみた。同じように、道光期の表4-3では道光2年(1822)の田賦と道光9年(1829)の人口を仮にリンクさせた。嘉慶期と道光期のデータについて統計上のミスや記入の誤りなどの理由で矛盾点が結構存在したが、全体像を読みとる上では有用であろう。康熙期の賦役改革より官田と民田が統一されたため、「田地」というのは官民田の耕地以外に利用できる山地・池・果樹園・新しく開墾した農地などが含まれている。したがって、計算した1畝当り米納額は前に説明した徴収基準(1畝当り6升を徴収した)より随分下回っている。賦税収入は実物と貨幣であったが、順治期以来漕糧と軍米以外の農産物と田賦は銀で折納(振替納税)された。1石米が当時どのような基準で決められたかが曖昧であったので、各地域で分かる範囲の市場米価で計算しなおした。また、1人当たりの米納額・銀納額は実際の人口数で平均したもので、1人丁の平均数ではなかったが、各県の人々が実際負担した田賦額であった。

26) 厦門大学歴史研究所中国社会経済史研究室著『福建経済発展簡史』厦門大学出版社、1989年、149頁。

付加税として、1石税米は「糧折銀」と「四差銀」、1丁は「三差銀」と「塩銀・糧銀」を加える。

表 4-1 福建府別田地・田賦(乾隆期)

地区分布	府州	田地*1 (畝)	指数	銀納額 (両)	米納額 (石)	米納額*2 (両)	人口*3 (万人)	銀納率 %	米納額(石) /1畝	銀納額(分) /1畝	田地(畝) /1人	米納額(石) /1人	銀納額(分) /1人
閩東	福寧府	482,505	100	39,697	6,988	6988×1.5=10482	63.2	79	1.4	82	0.76	1.10	6.30
	福州府	2,287,824	474	148,445	14,751	14751×1.7=25077	257.2	86	0.6	65	0.96	0.62	6.30
	小計	2,770,329		188,142	21,739	21739×1.6=34782	300.4	84	0.78	68	0.92	0.72	6.30
	建寧府	2,231,893	463	159,894	16,685	16685×1.6=26696	112.5	86	0.7	72	1.98	1.50	14.2
	邵武府	933,190	193	62,325	12,320	12320×1.6=19712	60.3	76	1.3	68	1.55	2.04	10.30
閩北	延平府	1,073,206	222	81,001	16,392	16392×1.6=26227	78.1	76	1.5	75	1.37	2.10	10.40
	小計	4,238,289		303,220	45,397	45397×1.6=72635	250.9	81	1.1	72	1.69	1.81	12.10
	泉州府	1,384,381	287	105,747	5,921	5921×1.8=10658	211.8	91	0.4	76	0.65	0.28	5.00
	漳州府	1,010,837	209	109,904	2,746	2746×1.8=4943	285	96	0.3	109	0.35	0.10	3.90
	興化府	1,361,416	282	67,388	10,085	10085×1.5=15128	44.5	82	0.7	49	3.06	2.27	15.10
閩南	永春州	375,886	78	30,794	—	—	40.5	100	—	82	0.92	—	7.60
	小計	4,132,520		313,833	18,752	18752×1.7=31878	581.8	91	0.5	76	0.71	0.30	5.4
	台湾府	585,688 #1	121	—	1691.49(栗)	—	90.0	0	—	—	0.65	18.79	—
	汀州府	1,220,216	253	104,530	14,791	14791×1.8=26624	126.5	80	1.2	86	0.96	1.17	8.30
	龍巖州	291,012	60	23,990	—	—	28.3	100	—	82	1.03	—	8.50
福建合計	15,111,228		1,285,200	147,910	1,479,100×1.8=2662,400	2,448.8	83	1	85	0.98	1.00	8.3	
福建合計	13,238,050		734,124	100,679 #2	1,006,790×1.7=1,711,523	1,377.9	81	0.8	78	1.24	1.96 #2	5.3	

出所：*1 田地・銀納額・米納額・人口は『福建通志』乾隆二十九卷、十二田賦より。田地は官田と民田の農地・山地・池・園の合計数。

*2 米価は王業鍵「十八世紀福建的糧食供需与權衡分析」の表3より。

*3 曹樹基『中国人口史』の表5-1-2の1776年人口データより。

注：#1 台湾の田地は51,785甲であった。1甲=11.31畝(同治戸部則例卷五)。

#2 台湾府の米納額は169,149石の粟で、福建合計の米納額は台湾を含んでいない。米納額/1人は台湾人口数を含んでいない。

表4-2 福建府別田地・田賦 (嘉慶期)

地区分布	府州	官民田*1 (畝)	指数	銀納額 (両)	米納額 (石)	米納額*2 (両)	人口 (万人)	銀納率 %	米納額(升) /1畝	銀納額(分) /1畝	田地(畝) /1人	米納額(升) /1人	銀納額(分) /1人
閩東	福寧府	543,716	100	50802	9367	9367×16=14987	76.3	77	1.7	9.3	0.71	1.22	6.70
	福州府	2,775,430	510	216,490	17,286	17,286×16=27658	259	89	0.6	7.8	1.07	0.66	8.40
	小計	3,319,146		267,292	26,653	26,653×16=42645	335.3	86	0.8	8.1	0.99	0.79	8.00
閩北	建寧府	2,134,219	393	202,217	16,277	16,277×16=26043	322.8	89	0.8	9.5	0.66	0.50	6.30
	邵武府	951,729	175	83,353	12,297	12,297×16=19675	63.8	81	1.3	8.8	1.49	1.92	13.00
	延平府	982,388	181	108,314	15,969	15,969×16=25550	85.3	81	1.6	11	1.15	1.87	12.70
	小計	4,068,336		393,884	44,543	44,543×16=71299	471.9	85	1.1	9.7	0.86	0.94	8.30
閩南	泉州府	1,433,179	264	123,324	11,408	11,408×25=28520	244.9	82	0.8	9	0.59	0.47	5.30
	漳州府	1,083,963	199	145,740	11,605	11,605×28=32494	339.8	82	1.1	13.4	0.32	0.34	4.06
	興化府	1,431,161	262	89,735	13,607	13,607×16=21771	53.1	81	1	6.3	2.69	2.56	16.90
	永春州	479,968	88	40,447	3,106	3,106×16=4970	48.3	89	0.6	8.4	0.99	0.64	8.40
	小計	4,428,271		465,246	39,726	39,726×21=83425	686.1	83	0.9	9.2	0.65	0.58	5.90
閩西	台灣府	745,381	137	14,037	188,480(栗)		178.7	—	—	—	—	—	—
	汀州府	1,315,322	242	1,358,92	14,651	14,651×16=23442	149.5	85	1.1	10.3	0.88	0.98	9.10
	龍巖州	306,320	56	32,028	483	483×16=773	33.2	98	0.2	10.5	0.92	0.15	9.60
	小計	1,620,642		1,67,920	15,134	15,134×16=24214	182.7	87	0.9	10.4	0.89	0.83	9.20
福建合計		14,181,776		1,248,979	126,056 #1	126,056×16=20169	1,854.7	86	0.9	8.8	0.76	0.75 #1	6.70

出所：*1 官民田・銀納額・米納額・人口は梁方仲『中国歴代戸口・田地・田賦統計』408頁(嘉慶重修一統志)
 *2 『清宣宗實録』卷四一、56頁。道光2年(1822年)漳州府米価は2.80~3.33両/石；一般米価は1.30~1.90両/石。平均数1.6両/石で計算した。
 注：#1 台湾府の米納額は188,480石の粟で、福建合計の米納額は台湾を含んでいない。米納額/1人は台湾人口数を含んでいない。

表 4-3 福建省別田地・田賦 (道光期)

地区 分布	府 州	田地*1 (畝)	指数	銀納額 (両)	米納額 (石)	米納額 #1 (両)	人口*2 (万人)	銀納率 %	米納額(升) /1畝	銀納額(分) /1畝	田地(畝) /1人	米納額(升) /1人	銀納額(分) /1人	
閩東	福寧府	414,548	100	32,627	21,32	21,32×16=3411	79.3	91	0.5	79	0.52	0.26	410	
	福州府	2778,489	638	174,694	17,292	17,292×16=27667	270.7	86	0.6	63	1.03	0.63	650	
	小計	3,193,037		207,321	19,424	19,424×16=31078	350	87	0.6	59	0.91	0.55	590	
	建寧府	2278,013	609	41,415	7,234	7,234×16=11574	325	78	0.3	18	0.7	0.22	130	
	邵武府	951,708	251	63,997	12,296	12,296×16=19674	64.6	76	1.3	67	1.47	1.90	990	
閩北	延平府	997,903	264	80,126	15,968	15,968×16=25549	86.9	76	1.6	80	1.15	1.83	920	
	小計	4,227,624		185,538	35,498	35,498×16=56797	476.5	77	0.8	43	0.88	0.74	390	
	閩南	泉州府	1,431,270	370	106,373	11,378	11,378×16=18205	252.2	85	0.8	74	0.57	0.45	420
	漳州府	1,084,422	277	111,208	11,602	11,602×28=32486	360.4	77	1.1	103	0.3	0.32	310	
閩西	興化府	1,431,160	366	72,192	13,607	13,607×16=21771	56.2	77	0.9	5	2.55	2.42	1280	
	永春州	2,226,999	570	159,807	19,382	19,382×16=31011	50.6	83	0.9	7.2	4.4	3.80	3160	
	小計	617,3851		449,580	55,969	55,969×16=89550	71.94	83	0.9	7.3	0.86	0.78	620	
	台灣府	595,144 #2	130		19,785(栗)		190.8							
	汀州府	1,315,322	354	104,034	14,651	14,651×16=23442	154.7	82	1.1	7.9	0.85	0.95	670	
福建合計	龍岩州	306,330	81	24,739	482	482×16=771	34.3	97	0.2	8.1	0.89	0.14	720	
	小計	1,620,652		128,773	15,133	15,133×16=24213	189	84	0.9	7.9	0.86	0.80	680	
福建合計		15,810,308		1,092,371	100,825 #3		1925.7			6.9	0.82	0.58 #3	6.3	

出所：*1 『福建通志』 民国 五十一総巻 田賦巻二 (道光2年 『新刊賦役全書』)

*2 道光 『福建通志』 巻48 戸口 道光2年 (1822年) 漳州府米価は280～333両/石；一般米価は130～190両/石。平均数
注： #1 『清宣宗実録』 巻四一、56頁。

#2 台湾の官田は52621甲であった。

#3 台湾府の米納額は197,685石の粟で、福建合計の米納額は台湾を含んでいない。米納額/1人は台湾人口数を含んでいない。

乾隆期の表4-1を見ると、漳州府・泉州府に属した南部において田地の面積が北部と同じであったが、人口は北部の倍近くであった。全省の銀納率は平均81%で、南部・東部・西部・北部の順番で、南部が一番高かったのである。1人当りの銀納額や1畝及び1人当りの米納額については南部が一番低かった。同じ方法で北部の三府を見ると、建寧府の田地面積は昭武府・延平府より大きかったが、1畝当り米納額は平均1.1升より低かった。ただし、1人当り田地と銀納額は昭武府・延平府より少し高く見える。それで、米が豊富ではなかった建寧府において昭武府・延平府より銀納率が高く現れた。東部2府を見ると、福州府の田地面積が福寧府の約4倍で、1畝当りの差が大きすぎて、米の不足が明瞭となる。福州府・漳州府・泉州府・汀州府が食糧不足区であったこと²⁷⁾が推測できる。

嘉慶期の表4-2の各地域については田地と銀納額は南部・北部・東部・西部の順番で、南部が一番高かったのである。米納額は北部・南部・東部・西部の順番で、1人当たりの米納額は北部・西部・東部・南部の順番で、1人当たりの銀納額は西部・北部・東部・南部の順番である。1人当りの銀納額と米納額については南部が一番低かったし、2番目が東部であった状況が変わらなかった。

『嘉慶重修一統志』嘉慶25年(1820)の統計と『福建通志』道光9年(1829)の各府県のデータは統計上の間違いが多く見られる。例えば、1820年に永春州の田地が479,968畝であったものの、1829年に2,226,999畝になったというように大きく増加した。それは記載のミスか実際の数字かについて判断しにくい。ほかの県のデータが多少増減したが、変化が大きくなかったとみられる。また、銀納額、米納額の数値は永春州・福寧府・建寧府を除いて、嘉慶期が道光期より上回っていることが分かった。すなわち、田地数が変わらなかった県は米納額が安定したが、銀納額がほぼ減少したという。それはなぜであろう。米納額が変化しなかったことについて二つ可能性が考えられる。一つは民国『福建通志』を編纂したときに、道光期の田賦は嘉慶期の数字が引用されたものである。もう一つは道光2年

27) 前掲王業鍵、71頁。

『新刊賦役全書』から取り上げたもので、実際の数字であった。そうであれば、銀納額が減少したことも事実であるという可能性がある。銀納額の減少は各府県に納税状況の反映であろう。その仮定は成立すれば、東部と北部の各県の田賦徴収は西部と南部よりもっと難しかったといえよう。

乾隆～嘉慶期のデータをみれば、田地は建寧・延平2府が減少したが、ほかの県が増加したように見える。銀納額がすべて増えたことに対して、北部3府と汀州府の以外に米納額が多少増えた。それぞれの人口数と合せてみると、1人当たりの銀納額は嘉慶期のほうが多くなった。同じ方法で乾隆期と道光期のデータを比べると、1人当たりの銀納額は道光期のほうが少なくなった。

順治期18年(1661)から道光2(1822)年まで省の規模のデータから見ると、清代初期から道光まで田地の面積や田賦がやや増加したように見える。その原因は康熙改革より増加した人口が賦税を納めなかったことや墾田の増加などがあげられる。各府県の考察より、道光期まで田地の面積はやや増加したことに対して、田賦の銀納額が緩慢に増えたものの、米納額が低迷したように見られる。田地面積は乾隆期に北部が一番多かったが、嘉慶と道光に北部を抜けて南部が1番になった。南部の銀納額はずっと一番目であった。清代中期まで人口の急成長に伴い、耕地面積が限られた福建各府では徴収が難しくなったことは道光期に田賦額の減少が一致したものであろうかと考えられる。そして、米穀不足の下で、各府県は田賦額の76%以上を占めた銀納額を納めるために、商品作物の栽培や特産物の販売のような商品経済を追求することから利益を獲得することしかなかったと思われる。民間市場で貨幣需要が高まっていったと予想できる。漳州・泉州2府のように、人口が多くて食糧がもっとも不足であった南部地域では北部より貨幣を媒介物として、商品経済を早めに進んでいた。食糧市場の背後に単純な食糧売買ではなく、砂糖・煙草・紙・木材・茶など主要な商品作物の取引が行なわれたと言われている。²⁸⁾

28) 三木聡『明清福建農村社会の研究』北海道大学図書刊行会、2002年、94 - 95頁。王業鍵王業鍵「十八世紀福建的食糧供需与糧価分析」『中国経済史研究』1987年第2期85頁。山本進『清代の市場構造と経済政策』名古屋大学出版会、2002年、135頁。

全体からいえば、食糧の問題と田賦銀納化は各地域に異なる影響をもたらし、商品経済趨勢にも差異が出ている。具体的にいえば、米穀不足のため、食糧を購入しなければならない南部地域と米穀豊富で、食糧を提供する北部地域ではそれぞれの商品作物や手工業の特徴が異なっている。

3. 商品経済の発展

清代中期まで新開墾した田地が僅かであったが、農村人口は急成長した。生活を維持すると徴税を納めるために、食糧不足の南部からはじめ全域まで、商品作物の栽培が増加した。

表5には製糖業の展開の例としてまとめてみた。明末から福建の砂糖を海外に輸出し始め、日本市場で人気があった。36県生産した中で漳州府・泉州府は主要な産区であったといわれている。漳州府については嘉慶『漳州府志』巻五、民俗に、「閩之属、火耕而水耨。生齒日繁、民不足於食、仰給他州。又地滨海舟楫通焉、商得其利而農漸弛、俗多種甘蔗・煙草、獲利尤多。然亦末食而非本計也。」という。

(福建では農業を行っていたが、人口の増加をまかなうことができず、他県に食糧を依存していた。また、沿海地域は船で行けるところまで交易が行なわれて、農業への熱心がなくなった。この地方の風俗として甘蔗・煙草を植えて利益が多く出た。しかし、これらは農業の本計ではなかった。)

農民が更なる利益を獲得するために、稲田を蔗田・煙草の畑に変えたことが福建の食糧不足を加速した。北部では食糧が豊かであったが、商品作物を栽培してから食糧の単価も上がったとしばしば指摘した。

表6は先行研究により、特産物と主な手工業の地域分布について示したものである。全体的に言えば、明代の中後期に商品作物の栽培が始まった。煙草は明代の万暦年間漳州人より福建へ導入されたと言われ、康熙期から乾隆期にかけて、葉煙草栽培が展開された。²⁹⁾ 甘蔗の栽培は明代から始まったが、国内の北部と海

29) 前掲『福建経済発展簡史』48頁；三木聡86-7頁表3。

外需要により、解禁してから利益を追求するために稲田から蔗田に変わる県が多くなってきた。茶葉の生産は清代前期に明代のように貢品としての需要量は多くなかったが、清中期から後期にかけて国外へ大量に輸出された。

表5 福建製糖業の展開

地域	府名	産地県名	史料記叙内容	出所
閩東	福寧府	霞浦、福安	〔貨類：砂糖煮蔗為之〕	〔福寧府志〕卷十二 物産
	福州府	閩県、侯官、羅源、閩清	①〔以新洲為盛、年約産糖二、三万担、馬洲、官洲、甘洲次之〕 ②〔引水不及之處、種菁、種蔗、伐山采木、其利乃倍于田〕	〔閩侯県志〕卷二十三 物産 〔福建通志〕卷五十五
閩北	建寧府	甌寧、建陽、浦城	崇太里為一県之中甘蔗〔所産為最〕 上下嵐及大茅洲是一県之中甘蔗〔所産為最〕	〔建陽県志〕卷四 〔浦城県志〕卷七
閩南	泉州府	晉江、南安、同安、惠安、安溪	①〔泉地沙園強半皆植菅蔗、甘蔗〕〔甘蔗幹小而長居民磨以煮糖泛海售商其地為稻利薄蔗利厚往々有改稻田種蔗者故稻米益乏〕 ②〔泉州枕山而負海、…附山之民墾辟硤确、植蔗煮糖、黑白之糖行天下〕 ③〔俱出晉江、南安、同安、惠安四県〕〔外安溪也産〕 ④明中期〔国初貢物亦少、吾邑只有白糖三百五十斤、糖霜一百斤〕 ⑤〔糖利甚多、種蔗田多、則妨稻〕	〔乾隆泉州府志〕卷十九 物産 〔閩書〕卷三十八 風俗志 〔泉州雜志〕卷上 〔惠安県志〕卷七 上供 嘉慶〔惠安県志〕卷十三
	漳州府	龍溪、漳浦、南靖、長泰、海澄、詔安	①〔俗多種甘蔗、煙草、獲利尤多〕 ②〔惟種蔗、種煙、会有兩倍收入、故多奪五穀之地以種之、田越少、而糧食越缺乏〕	〔光緒漳州府志〕卷三十八 民俗 〔龍溪県志〕卷十 風俗
閩西	興化府	莆田、仙遊	①〔沙田多種蔗〕、〔水田作隴種之〕 ②〔煮蔗汁為之有白糖清糖烏糖沙糖又有糖油再煮成者曰冰糖〕	〔仙遊県志〕卷八 〔仙遊県志〕卷七
	汀州府	長汀、寧化、漳平	明〔石沙糖八百五十斤、黑糖一百九十九斤〕 果之物：甘蔗	〔長汀県志〕卷八 賦税志 〔漳平県志〕卷一 輿地

注：産地県名のみ鄭昌滄『明清農村商品経済』374 - 377 頁の総統計を参考。

表6 福建各府県特産品と主要な手工業

地区	府州名	県名	特産品	主要な手工業
閩東部	福州府	霞浦・寿寧 寧徳 福鼎 福安	紫菜(茶・藍・砂糖・棉・磁器・棉布)*1 (藍・麻・苧・棕・紙)*2 磁器	製糖・製茶・藍栽培・魚業 製糖 製茶 製糖・製茶・煙草栽培・魚業
	福州府	閩県・侯官 福清 長楽 羅源・閩清 連江・永福 古田	荔枝・龍眼・福橘・橄欖(紙・糖・茶)*3 夏布・紫菜 夏布・荔枝 (藍・茶・布・糖・陶器)*4 (麻・苧・杉・黒糖)*5 (苧布・麻布・香瓜・紙)*6	印刷・造船・製塩 製糖 造船・製塩 造船・魚業 製糖 製糖・藍栽培 製茶
閩北部	建寧府	建安・瓊寧 建陽 崇安 浦城 松溪 政和	杉木(苧布・土絹・竹紙・茶・棉布)*7 夏布・香瓜・冬筍(紙・木)*8 蓮子・生熟煙糸 茶葉 蓮子・生熟煙糸 筍乾・紅瓜	製茶・製糖・藍栽培 製茶・藍栽培・製紙・印刷 製茶 製茶・製糖・藍栽培 製茶 製茶
	邵武府	邵武 建寧・泰寧 光澤	(杉木・紙・茶・漆・白磁器)*9 松・杉 夏布・筍乾(杉木・苧・紙・茶・糖・藍)*10	製紙・製茶・藍栽培 製紙・製茶 製紙・製茶・煙草栽培
	延平府	順昌 將樂 沙県 永安 南平	松・杉 紙 紙 杉樹・紙・筍(藍・糖・煙草・苧布・香瓜)*11	製紙 製紙・製糖 製糖 製茶 製茶・製糖
閩南部	泉州府	晉江 南安 同安 安溪	荔枝(塩・茶・糖)*12 荔枝乾・龍眼乾・砂糖(藍・塩・茶・磁器)*13 甘蔗(苧布・棉布・茶・磁器・藍)*14	糸織業 製陶器・造船・煙草栽培・魚業 製陶器・魚業・製塩 煙草栽培・製塩 製茶・製陶器
	漳州府	龍溪 漳浦 海澄 長泰 平和	砂糖・煙草(塩・茶・紅花・樟腦)*15 水糖・橋餅・煙草 水墨二品・器皿・眼鏡 (糖・煙草・棉布・紅花・藍)*16 松・杉 砂糖・煙草	造船・糸織業 煙草・藍栽培 魚業・製塩 煙草栽培 煙草栽培 煙草栽培
	興化府	莆田・仙遊	苧布・紅花・落花生(塩・糖・藍)*17 (茶・糖・藍・煙草・布・荔枝・松・竹)*18	煙草・藍栽培・魚業・製塩
	永春州	德化 永春 大田	夏布 磁器 (糖・苧布・麻布・茶・磁器・木器)*19	煙草栽培 製陶器・藍栽培 藍栽培 製茶
	台湾府		紅白糖・落花生	
閩西部	汀州府	長汀・武平 寧化 連城 上杭 永定	松・杉(藍・糖・茶・紙・苧・枕・竹糸器・扇)*20 巾布・鉄鎖・竹器・棕器 煙草	印刷 製糖・製紙・製藍・煙草 製糖・煙草栽培 製紙・印刷 製糖・製紙・煙草・藍栽培 煙草・藍栽培
	龍岩州	寧洋	藤枕・茶葉・落花生・煙草 紙	煙草栽培 煙草栽培

出所：手工業は曾玲の『明清時期福建手工業』第四章：『福建經濟發展簡史』176 - 197頁を参照。

特産品の() 外の方は三木聡表1-3から引用。() 内は各県地方志を参考。

*1 『福寧府志』乾隆27年、巻12物産、23頁。

*2 『霞浦県志』民国18年、物産22 - 23頁。

*3 『閩侯県志』民国22年、実業、3頁。

*4 『福安県志』乾隆27年、巻12物産、23頁。

*5 『永福県志』乾隆14年、巻1物産22頁。

*6 『古田県志』乾隆16年、巻2物産68頁。

*7 『康熙建寧府志』巻14物産11 - 12頁。

*8 『建甌県志』民国18年、実業巻25、5 - 6頁。

*9 『重纂邵武府志』物産171頁。

*10 『建寧県志』民国8年、巻27、物産32 - 3頁。

*11 『永安統志』道光14年、物産志460頁。

*12 『乾隆泉州府志』物産、28頁。

*13 『晉江県志』乾隆30年、輿地志、物産52頁。

*14 『同安県志』民国18年、巻11物産、343 - 4頁。

*15 『光緒漳州府志』巻39物産、3 - 4頁。

*16 『海澄県志』乾隆27年、巻15物産、17頁。

*17 『莆田県志』民国15年、輿地83 - 4頁。

*18 『仙遊県志』乾隆36年、輿地志6、物産226 - 9頁。

*19 『永春県志』民国19年、巻11物産志359 - 60頁。

*20 『汀州府志』乾隆17年、巻8物産83 - 4頁。

山間部では主要な手工業は製茶・煙草・製紙・印刷・陶器・藍業・林業が、沿海部では煙草・造船・製塩・織物業・果物加工・魚業があげられる。例えば、製茶業は北部の武夷山を中心として、東部の福寧府・福州府の山地と南部の山地に展開し、23カ県まで広がっていた。煙草・藍栽培は明代後期海外から南部の漳州府・泉州府に導入された以来、北部3府・西部各府で生産された。製紙業は北部から西部各県まで展開し、連城を中心とした汀州府では重要な手工業になった。漳州府・泉州府・福州府は沿海の港口・海岸線を利用して、造船・漁業・製塩を起こした。乾隆『泉州府志』巻20、風俗に「泉地隘而礪脊。瀕海之邑耕四而漁六。山県田於畝者十三、田於山者十七」というように、泉州府の土地は狭くやせていて、沿海部の人々は農業に四割、漁業に六割が従事していた。山間部の県では平地の田が三割で、山地の田が七割であった。国内外の市場で磁器も有名であって、統計によると、残した製磁の遺跡は永春に15、徳化に155、安溪に105、晋江に7、南安に3カ所があった。³⁰⁾

『福建通志』や地方志の物産巻を参考したうえで、次のように概観していいであろう。福建省の重要な商品作物であった砂糖と煙草が明後期福建に伝入して以来、各府県で栽培された。東部と南部各府県は沿海部と山間部が並存したので、沿海各県で造船・漁業・製塩・果物を中心とし、山間部各県は製茶を中心とした。それ以外に、南部では製磁・糸織業が挙げられ、北部で山地が多かったので、製紙・製茶・木材と林産物の加工業が挙げられる。西部では製紙・印刷業がもっとも重要であった。明清期の手工業については、山地と沿岸地帯に伸ばし、山区に発展した業種が沿海部より多くて、もっとも交通不便な所にあったというように曾玲が揭示した。³¹⁾

清代において福建は国内と海外の市場に恵まれ、官営手工業が弱くなった一方、民営手工業が発展した。家内手工業から出発した農民は特産物の生産が穀物以上

30) 前掲曾玲、166頁、引用自葉文程『中国古外銷瓷研究論文集』193頁統計表。

31) 前掲書、144 - 5頁。

の利益をもたらすことを知り、市場需要に従って生産する傾向があった。また、海外市場を支配した商人たちは各地域の特産物を買収するために、現地で農民とのつながりを強めるようになった。曾玲の研究³²⁾により、連城紙の生産と販売について製紙の全過程が商人に支配された。例えば、紙業の場合は原料準備の「料戸」、生産者の「槽戸」、運送・販売の「商人」という3つの段階がある。「槽戸」は「商人」に借金したので、契約通り品質・数量・納期などに従わなければならないのである。「槽戸」は「料戸」に資金を借りて、「料戸」はまた農民に資本を借り、農民が資金提供・品質管理・納期から生産までを管理するケースが多くなった。製茶業も商人が大量な資金を用意して、現地の山を借りて、茶を植えることから生産し始めた。生産の中心は北部の崇安・甌寧から浦城・邵武・建陽まで広い範囲の産地となった。その経営類型は三つに分けられた。³³⁾ 一つは小生産者であった茶農が山地を持ち、小規模で生産した茶葉を自ら加工したのである。その二は茶園を大量的に所有し、人を雇用して、経営する地主型であった。最も実力を持っているのは客商と呼ばれ、他省或は南部地域からきた商人である。その中に多く占めた南部商人は、非生産地から資金を持って、生産地であった北部で山地を借りて、茶の生産に従事した。また、茶の製造に精通した技師を南部から呼んで、北部に建てた製茶工場加工させる。製造した茶を広州まで長距離に運んで輸出の取引に従事する「広東十三行」の閩南籍商人と交易した。それで、18世紀初期から19世紀中期かけて茶貿易のシェアの半分は原料生産から輸出までの段階をすべて担った南部商人に握られていた。

以上考察したように各地域手工業の成長に伴って、生産された商品作物の取引が行なわれる市場を求め、都市と違って、各府県に郷市を中心にした定期市を発展させた。この定期市は県域で行なわれた城市と違って、農村で形成した周期的な小市場であったので、福建で墟市が称した。表7は地方志から各県の

32) 前掲曾玲、200頁。

33) 厦門大学歴史研究所中国社会経済史研究室著『福建経済発展簡史』厦門大学出版社、1989年、183頁。

墟市の状況をまとめたものである。明の弘治期と乾隆期を比べると、墟市数が倍増したことが明瞭であった。限られたデータから見ると、民国まで全体的に増える態勢であった。漳州府の各県では墟市数が乾隆期まで急成長し、他の県と比べられないほど多かった。齊藤史範は明清期の汀州府・漳州府の墟市数を研究した結果「沿海の県の墟市数と山間の県の墟市数を比較すると、沿海の県がその数の上できわめて高く、しかも、増加の割合も高かった。それに比べて山間の県は墟市数も少なく、増加していた場合でも、その数は低かった。其の上、時代が過ぎるにつれて、横ばいもしくは減少する県もあった。」³⁴⁾ というように論じた。定期市の発展から、人口の成長と貨幣経済の浸透に伴い、各府県の経済発展の不均衡性が見えてくる。漳州府のような墟市数が多かった南部地域他の地域より貨幣の流通はもっと進展していたと思われる。

表7 福建各府県の墟市数の推移

地区分布	府州	県名	明(弘治期) *1	乾隆期	道光期	光緒	民国
閩東部	福寧府	霞浦		8 *2			30 *13
		福安	1	11			
		寧徳		13			
	福州府	古田	1	7 *3			
永福		0	26 *4				
閩北部	建寧府	建安	4				24 *14
		瓯寧	6				5 *15
		政和					
	邵武府	建寧	1				19 *16
	延平府	南平	1				19 *17
		永安	6			4 *10	
閩南部	泉州府	晉江	9	11 *5			
		南安	2	14			

34) 前掲齊藤史範、828 - 9 頁。

		惠安	2	2			
		同安	3	10			26 *19
		安溪	3	1			
	漳州府	龍溪	8	37 *6		37 *12	
		漳浦	1	52		52	
		海澄		7 *7		9	
		南靖		35		35	
		長泰	1	17		17	
		平和		16		16	
		詔安		23		23	
	興化府	仙遊	1	34 *8			
	永春州	永春	2				27 *20
閩西部	汀州府	長汀	4	13 *9			25 *22
		寧化	6	13			
		清流	2	15			16 *23
		連城	3	6			14 *24
		上杭	1	29 *21			45 *25
		武平	1	5			27 *26
		永定	1	0			
		歸化	8	14			
	龍岩州	龍岩	0		15 *11		
		漳平	1		12		
		寧洋	0		1		

- 出所： *1 『弘治八閩通志』(二) 卷十四・十五地理・坊市 *2 『福寧府志』 乾隆27年修、卷八市集
 *3 『古田県志』 乾隆16年、卷二坊市 *4 『永福県志』 乾隆14年、卷二建置・街市
 *5 『乾隆泉州府志』 卷五都里 *6 『龍溪県志』 乾隆27年、卷一街市
 *7 『海澄県志』 乾隆27年、卷十六坊里・市鎮 *8 『仙遊県志』 乾隆36年、卷九建置志・市鎮
 *9 『汀州府志』 乾隆17年、卷五街市 *10 『永安県統志』 道光14年、卷九風俗・墟集
 *11 『龍岩州志』 道光14年、卷二規建志・街市 *12 『光緒漳州府』 疆域・街市
 *13 『霞浦県志』 民国18年、卷六城市志・市集 *15 『民国政和県志』 卷六都市
 *14 『建甌県志』 民国16年、卷六城市・街市、建安と甌寧は合併して建甌になった。
 *16 『建寧県志』 民国8年、卷一疆域・墟市 *17 『南平県志』 民国10年、卷四城市・墟市
 *18 『民国順昌県志』 卷三都市 *19 『同安県志』 民国10年、卷六城市
 *20 『永春県志』 民国19年、卷六城市志・街市 *21 乾隆『上杭県志』 卷一区域・版籍
 *22 『長汀県志』 民国31年、卷五城市志 *23 『清流県志』 民国36年、卷三建置志
 *24 『連城県志』 民国27年、卷六城市志 *25 『上杭県志』 民国27年、卷五城市志
 *26 『武平県志』 民国30年、卷五城市志

4. 海外貿易の影響

各地域の特産物は国内販売だけではなく、海外市場で人気がある商品であった。海外貿易の影響で各地域の民間市場で使用された貨幣にどのような変化をもたらしたかという視角から貨幣の流れについて検討したい。

清代福建の海外貿易発展について1641 - 1684年間日本との貿易は海外市場の30%ぐらいを占め、海禁以後から1843年にかけて日本・マニラとの貿易が減少しつつ、フィリピン以外の東南アジア諸地域、欧米との貿易を拡大した。³⁵⁾ それを基にして、3期に大きく分けてみたい。第一期は順治初期一康熙22(1684年)年まで密貿易が行なわれた時期である。第二期は1684年に海禁を解除してから道光初期まで廈門港の貿易の拡大期である。第三期は1843年以降福州と廈門が開港場として利用された時期である。

密貿易時期に周知のように福建は活躍的な地帯として知られた。日本との貿易を例としてみれば、表14のように二つのデータ³⁶⁾が挙げられる。若干の違いを存在しているが、福建出発の船がそれぞれの時期に全体の半分以上を占めたことが明瞭である。明清交替の時から1654年まで東部の福州船数がやや多かったが、1656 - 1684年の海禁時期に福州船が急に減少し、安海船を含めて、漳州・泉州に属した南部に集中した。永積洋子の唐船データで安海船の比例が多く、岩生成一のデータでは安海・台湾船の数が多く占められた。これは福建沿海部で清朝に抵抗した鄭氏集団を中心とした密貿易との関りが深かったのであろう。乾隆『福建通志』に「福建は既に外国と貿易し、その賊は船を操ることも戦うことも旨く、皆漳州・泉州・福寧の人だ。漳州の詔安には梅吟・龍溪・月港があり、泉州の晋江に安海があり、福鼎には桐山がある。」³⁷⁾ 安海は泉州府に属して、鄭成功の故郷で、鄭氏集団の密貿易の根拠地であった。こ

35) 前掲岸本美緒、190頁。

36) 岩生成一「近世日中貿易数量的考察」『史学雑誌』1953年、62巻11号。永積洋子『唐船輸出入品数量一覧 1637 - 1833』1987年、創文社。

37) 乾隆『福建通志』巻74。

の密貿易期間に東部地域と比べると、閩南商人たちが獲得した利益がかなり多かったと予想される。

表14 17世紀福建船数

中国の年号	西暦	福州		安海		漳州		泉州		台湾		福建船の 占め率%	
明末	1641-3	-*1	9*2	-*1	3*2	-*1	4*2	-*1	-*2	-*1	-*2	-*1	52*2
順治 3-4年	1646-47	4	22	4	—	6	8	7	2	1	—	76	71
5-8年	1648-51	26	24	30	13	23	30	—	—	1	—	44	49
9-11年	1652-54	33	21	43	38	4	2	7	6	—	—	55	61
12-14年	1655-57	12	5	72	83	—	3	14	4	—	—	64	66
15-17年	1658-60	6	1	72	43	—	—	—	—	—	—	51	58
順末-康熙4年	1661-66	4	—	39	18	—	—	—	—	32	3	34	48
康熙5-18	1667-80	5	—	—	—	7	—	6	—	142	—	36	—
康熙19-21	1681-83	1	1	—	—	—	—	—	—	27	8	45	36
	1641-83年間	91	74	260	195	40	43	34	12	203	11	46	57
	1684-1700	205	—	—	—	37	—	54	—	—	—	—	—

出所：*1 岩生成一「近世日中貿易数量的考察」12-13頁の表より。

*2 永積洋子「唐船輸出入品数量一覧 1637-1833」『唐船輸入目録』36-100頁より。

注：岩生成一より、1684-1700年間 厦門港から117隻であった。

日本に輸出した商品は生糸・絹織物・薬種・砂糖・染料・磁器・雑貨などを主にしたが、生糸以外に表6のように、南部諸府で仕入れることができるものであろう。桑が福建に生産しなかったので、商業資本を利用して、生糸を江南から購入した。「糖去棉花返」という民謡のように、南部産の糖を江南に売りに行き、帰りに棉を買って帰るということが普通であった。背後地であった東部・南部の各府に足を踏み入れた以外に、福建の西部・北部また省外まで購入しに行った。したがって、銀元は南部の商人を通じて、一部分省外に流出した以外、南部地域で使用された可能性が高いと考えられる。

第二期に1684年に海禁を解除してから泉州の厦門港は漳州の月港に代わり、税関を設置した。「厦門は漳(州府)・泉(州府)の門戸で、洋船の出入り口

としてもっとも重要になり」、³⁸⁾ 30余ヵ国と地域との貿易を拡大した。岩生成一の統計より、1684～1700年間廈門港から117隻の船が日本へ交易に行った。「1720年代から50年代にかけて、廈門から毎年海外にむけて出港ないし海外から帰港する帆船の数は20隻から70隻前後まで増加した。」³⁹⁾ 乾隆22～47年(1757～1782年)間ヨーロッパ船の来航を広州一港に限定されたので、廈門が南洋貿易に中心となった。だが、閩南商人は資本と取引の一部分を広州に移入して北部の特産物を陸路で運んで広州関から輸出した。乾隆～嘉慶年間「広東十三行」といわれた福建出身の商人は全て南部の漳州泉州の出身であった。⁴⁰⁾

また、この時期に福建は江浙と台湾との交易について山本進が次のように揭示した。⁴¹⁾ 江浙一福建一台湾は三角の交易関係ではなく、廈門を結節点としたL字型の交易関係を取り結んでいたのである。すなわち、福建は江浙へタバコや砂糖を移出し、江浙から米や木綿を移入したことを続けた一方、台湾に福建商品を移出し、台湾米を購入した。また、繊維製品のような福建本土で生産しなかった商品は江浙から移入され、台湾に転売された。このような交易関係の下で、泉漳二府は商品生産だけではなく中継貿易の拠点としても繁栄した。乾隆中期から嘉慶期まで、漳州府の龍溪・漳浦・平和・海澄・詔安五県、泉州府の晋江・南安・惠安・同安四県では米穀の自給率が低く、富裕層は海運業に従事して生計を立てていた。貿易港廈門は商人が輻輳し、外国米や台湾米を大量に移入していた。

第三期に1843年の五口通商の中で、福建省は廈門と福州2港を占めていた。福州港が開港されてから、福建省内において輸出商品の变化も出て来た。同じ茶の貿易を見ると、閩江を利用して、コストが下げられたので、茶輸出口は広

38) 「宮中档雍正奏摺」第21輯、353 - 4頁。

39) 前掲岸本美緒、185頁。

40) 梁嘉杉『広東十三行考』第3章、上海商務1937年版。引自庄国土「論17 - 19世紀閩南海商主導海外華商網絡的原因」『東南學述』2001年第3期、64 - 73頁。

41) 山本進『清代の市場構造と經濟政策』名古屋大学出版会、2002年、140；153頁。

州から福州に移った。広州・福建南部の商人は同じように資金を閩江上流に持ちだした。例えば、北部の建甌県は咸豊～光緒初期に茶の単価が高かったので、従事した商人が多かった。第一は汀州人、第二は南部永春・泉州人、第三は江西・広東人と地元と挙げられる。⁴²⁾ 19世紀80年代まで福州港から国際市場に輸出した茶の勢いは減少せず、最高年間輸出量が50万担になったといわれた。1865年後の福州税関年報に「市場に各種の茶が盛んになり、間に合わないぐらい…船が貨物を3ヶ月ぐらい待っている」と述べている。赤石茶市が有名になり、咸豊同治年間経営する御茶屋は60軒になった。沙県も新興茶区として、茶市は富口・琅口・漁溪湾・館前・雲溪などが挙げられる。⁴³⁾

しかし、北部では茶山や製茶工場の発展は必ず本地の人々の力ではなく、省外の移民と商人及び南部商人が積極的に参加したものであった。建陽県に赴任した陳盛韶は「建陽には山が多く田が少くない、荒い山に食糧がない…近來江西人が借りて茶山を開墾した。その租金が甚だ安く、その利益は甚だ多かった。春の2月数十万隣省人が急に來て、…米価も騰貴する」⁴⁴⁾という。地方志を見ると、北部の各県には工商業に従事する人が少なかったことが分かった。例えば、政和県では「工匠が少なかったが、…茶葉の隆昌で工場を設置し、…商家が資本を持ち、専門販売し、町並みを変化した。…物産は茶・杉・筍・紙を除き、他にはない。毎年三、四月の茶市を過ぎると、賑やかではない。」⁴⁵⁾という、崇安県では「本県民は智慧を開かず、生産がおくれている。その理由は職業を重視しなかったからである。茶葉の経営は下府(泉州、漳州の南部を指す)・広州・潮州の人である。果物の商人は福州人で、…大工・石匠が江西人であった」⁴⁶⁾とあり、「光澤県には農者が多く商者は少なく、死んでも故郷を離れない」⁴⁷⁾、南平県には「この人は

42) 李文治『中国近代農業史史料』第一輯、447頁。

43) 民国「沙県志」巻8、実業。

44) 前掲『問俗録』巻1。

45) 民国『政和県志』巻20、礼俗、614頁。

46) 『崇安県新志』巻6、礼俗、40頁。

47) 道光重纂『光澤県志』巻8、風俗、363頁。

謀略に拙くて遠いところに行くことも憚る。魚・塩・布・薬材を商売するのは他のところから来た商人である」⁴⁸⁾ という。したがって、北部の各県では食糧不足の問題があまり厳しくなかったので、商品作物の生産を導入するという自発行動より、外部の商人、特に南部商人の影響が非常に大きかったと考えられる。

この時期、厦門港を通じて台湾と福建南部地域の関係も変化した。砂糖、タバコなど高付加価値商品作物が台湾で栽培され、台湾米が福建以外の地域に販売されるようになった。近代になると、海外貿易に対して、台湾と福建南部の間、競争態勢が強くなったと言えよう。

この節で考察した結果からみると、福建各府県における人口が乾隆～道光期増加しつつ、沿海地域と山地地域の人口密度の格差が激しくなってきた。沿海部においても、平原地帯と山間地帯の相違も存在した。すなわち、東部地域では福州府は福寧府より、南部地域では漳州・泉州2府は興化府・永春州より人口がずっと多かったのである。経済的要因で南部地域から北部や台湾や海外に移動したことを見るものの、北部地域から移出したことが見られない。そして、福建省内の各地域において田賦の変化から食糧不足を解決するために、田賦を納めるために、北部より南部のほうが貨幣経済の発展が速まり、貨幣需要も増加したと推定した。

第2節 福建省内貨幣使用の地域差

1. 制銭の鑄造

福建省において宝福局と宝台局は乾隆～嘉慶期を中心に大量の制銭を鑄造した。「乾隆四年台湾一郡は異常に銭高であった。ここで、小銭の3文が内陸制銭2文に相当した。それ以前番銀1両は小銭1500文に易うるも、最近では800文なるのみ、兵民交々困す」⁴⁹⁾ 制銭不足を解決するために、福州の宝福局は銅を集中して、48,533串300文(1串=1000文)を鑄造し始めた。その

48) 民国『南平県志』巻10、実業、473頁。

49) 『福建通志』「銭法志」。

制錢を台湾に輸送して、「乾隆8（1740）年軍兵の給与のうちに毎月50文を制錢で支出し、乾隆59（1793）年で停止した。その後、嘉慶2（1796）年から道光4（1824）年までつづけられた。」⁵⁰⁾ ただし、道光4年までの82年間、制錢の鑄造量についての記録は全くない。官撰史料に記録した銅量数と鑄造数を基にして、福建省に購入された銅量を利用しながら、制錢鑄造量を大胆に予測してみたい。

表8 福建省乾隆期制錢量

中国の年号	雲南銅鉞購入数 合計(万斤)*1	日本の年号	輸入銅数量 (万斤)*2	制錢数 (万串)
乾隆7-27(1739-61)	172	寛保3-宝暦11	294	94.6
乾隆28-59(1762-93)	2024	宝暦12-寛政5	不明	336.4
乾隆60-嘉慶16(1794-1810)	718	寛政6-文化7	不明	123.9

出所：*1 雲南銅鉞購入数合計は嚴中平編著『清代雲南銅政考』85頁第3表より、時期は乾隆5年から嘉慶16年まで。

*2 永積洋子『唐船輸出入品数量一覧 1637-1833』「唐船輸出目録」より。

ここで、雲南銅鉞購入数と日本の唐船輸入銅数についてのデータをすべて正確であったものとして、表8をもとに、検討してみよう。乾隆期7～27年（1739～61年）の22年間で172万斤という銅数量は雲南銅鉞から6しか購入されなかったものである。日本から輸入銅数量294万斤というのは延保3年（1746年）～宝暦11年（1761年）帰帆荷物買渡帳より厦門船で持ち帰った銅と棹銅をあわせて統計した数字である。1715年に実施された正徳新例より、中国船を出港した地域と入港船数が限定されたので、福建省は厦門・台湾の船がそれぞれ2隻とされた。福建「錢法志」により、宝福局は毎年純銅17.8万斤を需要した。また、『福建省例』「錢法例」より、「庶民が錢文を需要するため、辺境の福建省では制錢鑄造を宝福局に依頼した。但し、僅か毎年4万3千余申しかなかったため、量が多くなく、省外に移出することを許さなかつ

50) 前掲書。

た。』⁵¹⁾ また、同条では宝福局を調べたところ、乾隆 23 年（1757 年）まで制錢四万三千余串であった。したがって、宝福局は乾隆期の 20 年代前後毎年 4.3 万余串しか鑄造できなかつたと考えられる。判明するかぎり雲南銅鋌と洋銅を合わせて合計 466 万斤になり、26 年間分の総量となる。因みに棹銅は純銅ではなかつたことも考量すれば、その銅量総計は少なくとも 22 年間の制錢が鑄造できるのであろう。すなわち、毎年 4.3 万余串、22 年間合計 94.6 万串鑄造したと予測できる。

巖中平は『雲南通志』を利用して、各省の購入した雲南銅量をまとめた。各省のデータを見ると、連続 10 年以上同じ購入量が持続したことは明瞭になる。この数字について吟味することは極めて難しいので、仮に正しいとすると、乾隆 28～59 年（1762～93 年）の間に福建省は毎年 652,920 斤を購入した。日本から輸入した銅量は宝暦 12 年（1762 年）から唐船記録の中で明確に乍浦船が記載された以外、ほかの船名が不明になったので、省略する。福建「錢法志」によれば、「江蘇商人が購入した洋銅は、暴風で福建につく時本省の定価通り毎百斤十七兩五分で購入し、雲南銅と併用した。」福建は琉球国が救護・送回した難商の持ち帰った洋銅数十万斤を買い取った。⁵²⁾ この考証より、福建省は日本銅を使った可能性が十分にあるといえる。この時期にも宝福局の年間鑄造量が 4.85 万余串で、17.8 万斤の銅を使ったというように仮定する。『福建貨幣史略』⁵³⁾ より、宝台局で鑄造した制錢は、主に台湾での軍兵の給与用に充てられ、毎年 6 万串で銅 48 万斤を需要した。したがって、乾隆 28～59 年（1762～93 年）の 31 年間宝台局と宝福局の合計が 336.4 万串になったと推定できる。

巖中平の統計には嘉慶 16 年（1810 年）までのデータしかなかったので、制錢の統計も道光 4 年（1824 年）までの見込みがもっとも難しくなる。乾隆 60

51) 1964 年台湾銀行經濟研究室編『福建省例』「錢法例」台湾文献叢刊第 199 種、台湾中華書局、1984 年、579 - 595 頁。

52) 朱淑媛「清代乾隆前期における琉球銅について」『琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集第五回』沖縄県教育委員会 1999 年 10 月。

53) 福建省錢幣学会編著『福建貨幣史略』北京中華書局、2001 年、66 - 8 頁。

年(1794年)から嘉慶16年(1810年)まで718万斤を購入したことが分かった。制銭の鑄造は乾隆59年に停止され、嘉慶2年に再開された。それで、14年間を平均すると、毎年51.3万斤余の銅が使われた。宝福局の年間鑄造量がずっと変わらないと仮定すれば、また乾隆期の宝台局のように毎年6万串で銅48万斤を需要するとすれば、年間宝福局の4.85万余串、宝台局の4万余串制銭鑄造量になる。嘉慶14年間制銭は123.9万串を鑄造した可能性がある。

以上の分析した結果からみると、制銭は乾隆7年から嘉慶16年まで554.9万串を鑄造したと考えられる。雲南銅が減少したと言っても、楊焜達の研究⁵⁴⁾より嘉慶7年～咸豊5年(1801-1855)まで雲南の東北地方を例とすれば、平均産出量は521.5万斤で、約3,123トンになった。また、道光4年(1824年)宝福局は鑄造を停止した時に103万斤の銅を残したこと⁵⁵⁾からを参考すれば、嘉慶16年以降採買した可能性が十分にある。仮に嘉慶2-16年間の銅総量の半分を購入したとすれば、60万串を鑄造したと考えられる。したがって、福建省において乾隆7年～道光4年(1739～1824年)間鑄造した制銭の累計は600～650万串になったと推算される。

また、このぐらい制銭量は完全に市場で流通されたと大胆に仮定すれば、嘉慶25年(1820年)の人口数とリンクしてみると、一人当たり制銭量は406～440文となる。ちなみに、1851年において食糧・棉布・棉・夏布・麻・繊維製品・生糸・茶・塩・アヘン・煙草・煙草の葉という12種類の主要な商品の流通量と流通額を計算した結果、一人当たり商品流通額2.44両(仮に1両=1000文)で、全国平均水準1両より倍以上高かった。⁵⁶⁾ そうすると、制銭を停鑄した1824年から1851年前後まで、市場で流通できる制銭量が極めて少なかったことがわかる。言い換えば、各制銭の蓄蔵、私人改鑄、省外の移出などの現象を含めて考えれば、福

54) 楊焜達「清代中期(公元1726-1855年)滇東北的銅業開發と環境変化」『中国史研究』2004年第3期。

55) 道光『福建通志』巻53、「国朝錢法」1077頁。

56) 林楓「試析清末福建市場商品流通額」『中国社会經濟史研究』1998年第1期83頁。

建民間市場では貨幣需要がはるかに多かったことと推測できる。その時期、福建官錢局は咸豊大錢と鉄錢を鑄造したが、間もなく行なわれた鉄錢風潮事件は民間市場の抵抗を表した。したがって、福建省内における貨幣需要が極めて高く求めている中、土地売券に見える地域ごとの貨幣使用が複雑な局面を反映している。

2. 地域別土地売券に見る使用貨幣

前稿で「閩南契約文書綜録」⁵⁷⁾と『明清福建經濟契約文書選輯』⁵⁸⁾を利用して、明清期福建省における貨幣の使用実態を分析した。本稿は經濟発展の状況と貨幣流通の関係を地域別に観察する目的で、土地売券契約数も少なかった北部に周知の清代閩北土地關係文書⁵⁹⁾を加えた。「清代閩北土地文書選編(三)」は全部貸付の取引で、主に穀物を使用しているので、省略した。

表9は永安県の19件と「清代閩北土地文書選編(一)、(二)」から87件を集計したもので、合計106件である。「銀・錢」の場合は10件があったが、そのうち永安は8件を占めた。乾隆期まで銀を中心に使用されたが、嘉慶期から錢遣いが見え始めた。いま利用している87件閩北土地契約以外におよそ2000件余があったといわれた。

表10はその中の建陽・函寧・南平の土地売買の貨幣使用状況を挙げている。順治期から乾隆期まで銀が集中的に用いられたが、嘉慶期に入ってから、銀使用以外の比率が18%→64%(道光期)→84%(咸豊期)に上昇し、同治期にも42%であったことが分かる。光緒宣統期に銀の取引が多くなることから判断すれば、道光—同治期の「銀使用以外」ということはおそらく北部では銅錢に轉換したと予想できる。

57) 楊国楨主編「閩南契約文書綜録」。

58) 福建師範大学歴史系編『明清福建經濟契約文書選輯』。

59) 楊国楨「試論清代閩北民間の土地売買」『中国史研究』1981年第1期29-59頁。楊国楨編「清代閩北土地文書選編(一)、(二)、(三)」『中国社会經濟史研究』1981年第1期111-121頁；第2期102-116頁；第3期99-106頁。傅衣凌「明清時代永安農村の社会經濟關係——以黃歷鄉發現各項契約為根拠の一箇研究」『明清農村社会經濟』北京三聯書店、1961年、24-6頁。

表9 清代福建県の取引例（北部106件）

貨幣種別	谷 (斤)	銀 (両)	錢・銀 (両)	錢 (文)	銀元 (圓)
①1645-1662 順治2-康熙元		7			
②1663-1680 康熙2-18					
③1681-1700 康熙19-38		2			
④1701-1720 康熙39-58		2			
⑤1721-1735 康熙59-雍正13		5			
⑥1735-1755 乾隆元-20		12		2	
⑦1756-1775 乾隆21-40		16		3	
⑧1776-1794 乾隆41-60		11			
⑨1795-1815 嘉慶元-20		15	4	2	
⑩1816-1835 嘉慶21-道光15		1	2	3	2
⑪1836-1855 道光16-咸豐5	1			4	1
⑫1856-1874 咸豐6-同治末			3	4	1
⑬1875-1894 光緒元-20			1		
⑭1895-1913 光緒20-宣統末				2	

出所：「清代閩北土地文書選編（一）、（二）」、
「明清時代永安農村の社会経済関係」24-6頁より。

表 10 建陽・甌寧・南平の土地売買

時期	土地契約数	銀で取引件数	銀以外使用率%
順治	7	6	14
康熙	5	3	40
雍正	6	6	0
乾隆	157	150	4
嘉慶	99	81	18
道光	168	60	64
咸豊	69	11	84
同治	115	67	42
光緒	349	258	26
宣統	31	29	6
合計	1006	671	33

出所：楊国楨「試論清代閩北民間の土地売買」36頁。

表 11 福建土地売券より地域内の件数分布

時期	南部（総件数：350）					東部（総件数：853）					北部（総件数：287）				
	穀物	銀	銀・銭*	銭	銀元	穀物	銀	銀・銭*	銭	銀元	穀物	銀	銀・銭*	銭	銀元
①	0	5				0	3				0	8			
②	0	9				0	2				0	1			
③		3		1		0	9				0	4			
④	0	7				4	36		1		0	6			
⑤	0	8				18	56		3		9			2	
⑥	0	35				14	42		32		20			5	
⑦	0	20			4	14	60	3	58	1	23			4	
⑧		23		4	29	14	33	10	71	2	15	2		6	
⑨		7		10	31	5	42	26	68		23	4	6	1	
⑩		9	3	26		1	14	7	52		2	3	10	2	
⑪				15	21		8	6	58		1			69	3
⑫		2	2	15	40		6	8	19	1	2	4	30	3	
⑬		7	1	7	16		1	2	20	3	3	5	15	5	
⑭		1		1	29		3	2	6	9	0				9

出所：「明清福建経済契約文書選輯」、「閩南契約文書綜録」1990年増刊、「清代閩北土地文書選編（一）、（二）」、
「明清時代永安農村的社会経済関係」24 - 6頁より作成。

*銀・銭は契約文書に最初銀両表示で支払いと書いたが、「決済或は質を請け出す時に毎両制銭800文で計算する」という銀銭比価をはっきり書いてあった件数を指す。

前稿では福建省内の地域分布を明確にしなかったので、「福建土地における地域内の件数分布及び貸付件数」⁶⁰⁾を修正した。すなわち、南部には興化府の莆田・仙遊の契約数を入れ、北部には106件新しいデータを加え、表11になっている。現在の集計から北部・南部・東部の特徴が見えてくる。南部の4府について⑧期から銀両の中心的地位がなくなり、銭・銀元の使用が多くなった。特に銀元が銭より清末まで用いられ続けた。東部の2府は④～⑩期まで穀物使用が少々あり、銀両使用を中心としつつ、⑥期から銭使用が始まった。銭使用

60) 拙稿「清代における福建省の貨幣使用実態——土地売券類を中心として」『松山大学論集』18 - 3、2006年8月、166頁。

が⑧～⑬期まで銀兩を越える趨勢が続いて、銀元使用は相対的に少なかった。⑦期～⑭期間の「銀・錢」の場合は、北部は南部より取引の件数が多いことが分かった。北部の3府について錢使用が⑤期から始まり、⑩～⑬期まで強くなり、銀元使用が僅かであったことが見られる。「銀・錢」の場合は南部より多かった。この趨勢は事実に近いならば、表10の嘉慶中期以後から同治末まで銀兩使用が減少したことと合わせてみると、錢使用が強くなったと考えてもよいであろう。したがって、福建省において乾隆期を集中的に鑄造した制錢は嘉慶～同治期に使用のピークをむかえたのであろう。経済発展の様子が異なるものの、錢と銀元をそれぞれ中心とした地域に分かれて、用いられたといえよう。

表 12 清代福建県の取引例

貨幣種別	福州府 侯官・閩清					延平府 南平					漳州府 龍溪						
	谷 (斤)	銀 (両)	錢 (両)	銀 (文)	錢 (文)	銀元 (圓)	谷 (斤)	銀 (両)	錢 (両)	銀 (文)	錢 (文)	銀元 (圓)	谷 (斤)	銀 (両)	錢 (両)	銀 (文)	錢 (文)
①1645-1662 順治2-康熙元	2					1											
②1663-1680 康熙2-18	6					1					2						
③1681-1700 康熙19-38	6					1					2						
④1701-1720 康熙39-58	3	34				2					7						
⑤1721-1735 康熙59-雍正13	18	50	3			4					15						
⑥1735-1755 乾隆元-20	12	39	2	17		1					4						
⑦1756-1775 乾隆21-40	10	54	1	35		4	4				9	4					
⑧1776-1794 乾隆41-60	8	41	10	45	2	4	1	3			3	3	18				
⑨1795-1815 嘉慶元-20	4	46	23	50		2	1			1	7				17		
⑩1816-1835 嘉慶21-道光15	1	10	6	44		1	4				3	2	3	23			
⑪1836-1855 道光16-咸丰5	7		5	37		2	1	60			10				11		
⑫1856-1874 咸丰6-同治末	14	8	14		12					3	2	18			37		
⑬1875-1894 光緒元-20	3	2	14	2		4	3	8		3	2				15		
⑭1895-1913 光緒20-宣統末	3		1	3	7	2					1				20		

出所：「明清福建經濟契約文書選輯」より作成。

また、各府で土地売券をもっとも多く観察できた福州府の侯官・閩清（702件）、延平府の南平（133件）、漳州府の龍溪（238件）の取引事例を整理してみた。東部、南部、北部についてそれぞれの特徴が各県のデータから見ること

ができる。福州府の侯官・閩清県周辺で銀両を中心とした一方、⑤期から銅銭使用が始まり、⑨期から銭使用の趨勢が銀両を超えた。また、東部では穀物使用もこの地域に集中し、「銀・銭」の場合は銭使用とともに存在し続けた。延平府の南平県は銀両を使用する一方、⑦期から銭と併用になり、⑪⑫期に銭使用が非常に強くなった。漳州府の龍溪では①期から⑥期まで銀両は主流であったが、⑦期から銀元が主要な使用貨幣になった。ただ、その同時に銅銭使用も存在した。

表 13 は道光期の典・當舖数（質屋数）と不動産契税（土地売買の税金）を集計したものである。土地売買をしたとき、契約額の合計 3.15% を契税として支払う、という規則がある。⁶¹⁾ 金額から見ると、地域別では西部で不動産契税が一番少なかったが、南部で一番多かった。府県別に福州府、建寧府、漳州府、泉州府の順になっている。土地売券件数が多かった侯官・閩清・南平・龍溪において道光期の「契税」より、5000 両、3600 両、2400 両、2600 両になり、県のレベルでも不動産取引が頻繁に行なわれた。もちろん、この契税額は官印を受ける手続きをした紅契の状況である。民間の官府に申請しなかった白契も多く存在したと思われる。また、典・當舖数を見れば、東部と南部の金融市場が強かったと見られる。福州府の所在地に近い侯官・閩県は恐らく貨幣使用が頻繁に行なわれた県であったと考えられる。

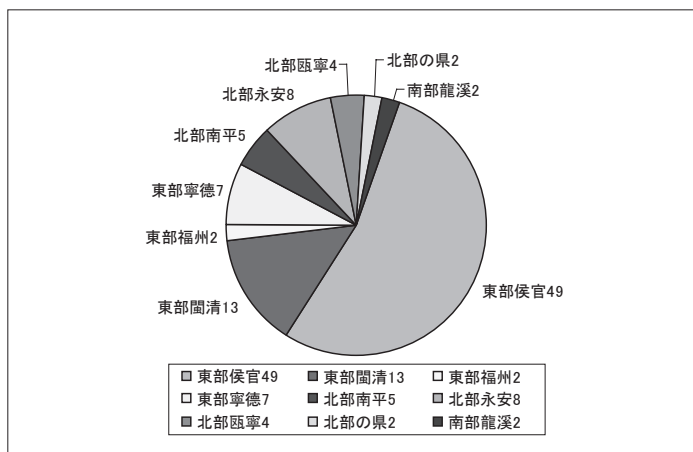
61) 李文治『中国近代農業史史料』第一輯、生活・読書・新知三聯書店、1957年、55頁。契税は土地売買契約額の3%である。其の上、銅銭及び細かい銀を元宝銀に変わるときにかかった費用は契約額の0.15%で、合計3.15%になる。

表 13 道光9年典・當舖数と不動産契稅

地区分布	府州	県名	典・當舖数	不動産契稅(兩)	地区分布	府州	県名	當舖数	不動産契稅(兩)
閩東部 不動産契稅 合計(兩) 22700 典・當舖数 合計 115	福寧府	霞浦	2	1300	閩南部 不動産契稅 合計(兩) 24600 典・當舖数 合計 269	泉州府	晉江	37	1800
		福鼎	2	1100			南安	9	1800
		福安	2	2200			惠安	38	700
		寧德	2	1200			同安	35	3500
		壽寧		400			安溪	7	700
	合計	8	6200	合計	126	8500			
	閩北部 不動産契稅 合計(兩) 22600 典・當舖数 合計 20	福州府	閩県	33	5000	漳州府	龍溪	19	2600
			侯官	16	3600		漳浦		700
			長楽	10	1200		海澄	8	2400
			福清	36	1400		南靖		700
連江			9	1400	長泰		1	600	
羅源			800	平和	1	1800			
古田		1	1000	詔安	54	1500			
屏南			700	合計	83	10300			
閩清			700	興化府永春州	莆田	13	1800		
永福		2	700		仙遊	37	1400		
合計	107	16500	合計		50	3200			
建安	2	1100	永春		8	1200			
瓊寧	5	1800	德化		2	500			
閩西部 不動産契稅 合計(兩) 7900 典・當舖数 合計 3	建寧府	建陽	1	1500	汀州府	大田		900	
		崇安	1	1500		合計	10	2600	
		浦城	1	3000		台湾			
		松溪		600		閩西部 不動産契稅 合計(兩) 7900 典・當舖数 合計 3	長汀	1	900
		政和		1500			寧化	1	500
	合計	10	11000	清流			400		
	邵武	3	1000	明溪					
	建寧	1	800	連城	1		1300		
	延平府	泰寧		600	龍岩州	上杭		900	
		光澤	1	800		武平		500	
合計		5	3200	永定			700		
南平		1	2400	歸化			700		
順昌			800	合計		3	5900		
將楽		600							
沙県	1	1800							
尤溪		1500							
永安	3	1300							
合計	5	8400							

出所：『福建通志』民国五十一総巻 道光9年賦稅志

図2 「銀・銭」の場合の地域分布



出所：「明清福建経済契約文書選輯」「清代閩北土地文書選編（一）、（二）」
「明清時代永安農村の社会経済関係」24 - 6 頁より作成。

「銀・銭」の場合について、合計 92 件が図 2 のように北部と東部に集中し、福州府の所在地に近い侯官・閩清県は件数の 63% を占めた。侯官県の件数には鄭氏家族が 32 件を占めたことが前稿で明らかとなった。一件ずつを分析してみると、閩清の 13 件に 6 件、永安の 8 件に 5 件が親族関係のようである。全清代に亘り、「銀銭比価表」のように、市場比価レートから乖離して、1 両 = 800 ~ 850 文に固定されたようである。これらの契約は「絶売」ではなく、代価の半分程度である「典売」の方が多かったのである。福建の民間定例としては最初の土地取引は売買と言っても、足し前を要求する「找価」行為をしない限りに、土地を買い戻すことができる。⁶²⁾ 福建の土地売買の名目については現代人が理解できないほどきわめて複雑である。恐らく親族間で行なわれた土地取引という点の一つの要因として念頭に入れて考えたほうがよいである

62) 楊國楨「試論清代閩北民間の土地売買」『中国史研究』1981 年第 1 期 32 頁。

う。土地所有権について小農と地主に別々の権利がある。すなわち、小農が土地を小作して、小作料（租）を納めてから利益が出るという権利は「田面」と呼ばれ、地主が国に土地税を払ってから利益が出る権利は「田根」と呼ぶ。いわゆる「一田二主」という現象である。そして、契約額は「紋銀」のような銀両を表示したが、その通りに高質銀両が支払われないので、銀錢比価が契約文書に書かれた。市場レートより固定した銀錢比価は複雑な「一田二主」に関わっている可能性はゼロといえないであろう。また、福州府所在地で制錢を鑄造したことで、その周辺には制錢の使用がもっと普通であったことも考えられる。

第3節 地域別貨幣流通の趨勢

以上の考察より、清代福建省の各地域について当面分かったことをまとめてみよう。

人口の推移からみると、乾隆中期から嘉慶期にかけて人口の急成長で新耕地の獲得や商売の機会などの経済的要因で移動したことが分かった。人口密度300人以上であった府州は全国に29箇所があるものの、福建省は2箇所を占めた。⁶³⁾ それは南部地域の漳州府と泉州府であった。地域内の人口圧力を解消するために、技術を持つ南部の人々は土地広い北部、西部に移動し、台湾と海外にも移動したとみられる。北部の人たちは他省に移動したことがあったが、人口密度が高かった南部地域や人口稀少の台湾に行った場合が少なかった。

食糧問題と納税の考察より、清初期から道光期まで、省の田地面積がやや増加したが、人口の増加に伴い、1人当たりの田地が全国水準以下に減少していった。4つの地域に分けてみると、乾隆期に田地面積は北部が一番目であったが、嘉慶に永春州と興化府農地が新しく開墾したので、南部が北部を抜けて一番目になった。しかし、人口と合わせて平均したら、南部地域の漳州府と泉州府が

63) 前掲梁方仲編著『中国歴代戸口・田地・田賦統計』甲表88、273 - 9頁。

西部地域より極めて低かったことが明らかとなった。したがって、南部の米穀不足は深刻であった。また、納税額は乾隆期から嘉慶期まで、銀納額と米納額が増加したとみられるが、道光期になると、米納額が維持していたが、銀納額が減少した県が多くなった。北部3府と東部福寧府の銀納額は乾隆期の水準近くまで減り、変化が激しかった北部より、南部のほうがある程度安定したと見られる。食糧不足の地域では銀納額が維持できたことは米穀で納める方法ではなく貨幣で納めたと考えられる。

商品作物の発展と分布を概観してみよう。明後期に導入された砂糖と煙草が南部から全域まで栽培された。北部では製紙・製茶・木材・林産物を中心とし、西部では製紙・印刷業がもっとも重要手工業であった。東部地域では造船・漁業・製糖・製茶を主にし、南部では造船・漁業・製糖・製磁・糸織業が挙げられる。国際貿易で一番売れた商品であった茶葉は北部の広い範囲と南部の安溪に集中した。全体的に言えば、北部・西部地域は生産原料を中心としたが、東部・南部は造船業を利用して、海運業に従事した。そして、南部商人は海運の優勢を発揮して、国内外貿易との関係が緊密になった。定期市の推移を見ても、明代後期から乾隆期にかけて南部地域の墟市数はほかの地域より多く開設され、清末まで持続した。

海外貿易の影響を検討してきたように、海禁時期に続けてきた密貿易は鄭氏集団を主にしたので、南部商人の商業活動を正式に行なうことが出来なかった。そのような状況で、省内の商品経済の発展趨勢をリードしなかったといえよう。南部商人が貿易で手に入れた銀元はその時期民間市場に重視されず、銀両を中心とした貨幣体制が主流であった。

1684年から1842年までの第二期は南部の厦門港の役割を果たした時期である。言い換えれば、福建全体の発展は南部から全域まで影響を及ぼした。福建は江浙と台湾との国内交易が厦門を通じて行なわれ、南洋との貿易も厦門港で輸入輸出された。乾隆中期から嘉慶期まで、泉漳二府は中継貿易の拠点としても繁栄してきた。一部の泉漳商人は他省の商人たちと同じように、北部の特産

物であった武夷茶は海外市場で人気があることを知り、その利益を追求した。北部地域の土地を借りて、茶葉の生産段階から販売まですべて製造過程を投資とコンドロールし、南部商人のネットワークで輸出し続けた。外国から大量に流入した銀元が南部商人の商売を通じて徐々に他省と北部地域に流されたと思される。

この時期、制銭が大量に鑄造され、市場で銀両・銀元・銅銭が流通されていたといえよう。商工業に主に従事する南部の各府には銀元が普通の貨幣のように用いられ、土地取引まで使用されたことも当然である。例えば、龍溪県のように清初から海外貿易を止まらずに行い、乾隆期に定期市が37ヵ所になった地区では商工業の発展は他県より速やかに進んだと思われる。それで、外国銀元がこの地域内で信頼され、使用範囲が土地取引まで広がっていた。ただ、土地売券から分かるように、この地域で銅銭使用も多少された。東部・北部の商人活動がある程度進んでいたが、恐らく国内貿易を集中したと思われる。食糧の商品ルートを通じて、国内の広州・江南地域・江西まで特産物を移出し、食糧・棉・糸など原産料を移入し、耕地不足分を補填した。江南地域と貿易をみると、福州商人が木材・花木・果物、泉州漳州商人が生糸・絹綢・棉・砂糖、建寧商人が紙・棕、汀州府商人が紙・書籍・煙草、興化商人が煙草を主に経営したと明らかにした⁶⁴⁾。福州港は国内海運に役割を果たしたが、国外貿易には第三時期の開港場として利用することをまたなければならなかった。恐らく、民間市場で使用された貨幣は銀元ではなく、銀両であったと考えられる。

東部と北部の土地所有者は商人たちに土地を貸して、地租は実物から貨幣まで徐々に変化したが、土地を完全に売って、商工業に従事する資本家になる場合が少なかったと予測できる。省都福州府で大量に鑄造した制銭は東部地域の民間市場にもっとはやく提供できた。商品経済の生産・販売に伴い、低質性・煩雑性をもつ銀両より便利な計数貨幣の需要を高める中、銅銭の信頼性が高ま

64) 前掲范金明。

り、銅銭が土地取引まで用いられた可能性があると考えられる。それで、土地取引のとき銀両使用を縮小しつつ、銅銭使用を拡大した状況になった。

福州港を開港して以来、東部と北部の商品経済の発展に拍車をかけた。19世紀80年代まで、茶ブームに乗って拡大した。福州港の輸出入によって、銀元の決済も自然なことになった。しかし、この時期制銭の鑄造がすでに停止され、民間市場で銀両、銀元、銅銭、紙幣（銀票、銭票）という混乱な状況に変わった。制銭を大量的に鑄造したといわれた乾隆期から道光4年まで推算された600～650万串制銭は市場流通需要量に充足していなかった状況なので、道光・咸豊・同治期に制銭が提供できなかったことによって、貨幣需要が極めて高く求められた。それで、おそらく東部、北部の市場では清代の前中期に亘って信頼されてきた銅銭がもっと注目され、南部では銀元が強めるようになった。土地取引の場合は地域ごとの貨幣使用の特徴が違っていたが、全体的に言うと、どの地域でも銅銭使用が若干存在した。

西部は汀江流域を利用して江西・広東との交易が多かったといわれる。製紙を中心とした大商人は広州港と通じて、外国貿易に参加した可能性があると思われる。ただし、土地売券の史料が見られないので、簡単にいえないであろう。

むすび

前稿で福建の土地売券を利用して考察した結果、全清代に亘って長期的に見れば、秤量銀両使用がしだいに縮小しつつ、計数貨幣銅銭・銀元使用への転換が顕著になった。そして、銀元使用の増加した態勢が南部で注目されつつ、東部・北部の銅銭使用が乾隆中期から増え始め、ピークは嘉慶一同治期であった。本稿では、先行研究の成果を参考しながら、福建各地域の人口・耕地・納税・手工業発展などの数量的な変化及び海外貿易の影響を考察した上で、貨幣使用の地域差が明らかとなった。

清代福建において貨幣経済発展の地域差は貨幣使用の地域差をもたらしたといえよう。各地域を総合的にみると、南部地域は流通と販売の中心で、北部地

域は生産と原料の中心であった。各地域では高付加価値商品作物を栽培したが、南部商人は海運業の優勢を發揮して国内外市場を結びついた。清代初期に海禁政策で、海外の商業活動が制限されたので、流入した銀元の量も多くなかったと考えられる。南部商人の商業活動より南部地域から全域まで外国貨幣が民間市場で徐々に用いられたが、土地取引まで意外に受け入れられなかったようである。

乾隆中期から五口通商まで、厦門港の背後地であった南部地域は国内外貿易の中継拠点の機能を果たして、全省の貨幣経済発展を加速した。海外貿易で入超した銀元とのバランスを維持するために、大量の制銭が市場に投入されたが、速やかに発展していた貨幣経済の下で、市場の需要量に応じていなかった。そして、銀両のいわゆる使用の煩雑さと種類の混乱及び低質性というような欠点が市場需要に適応できなくなった。もっと便利な計数貨幣が民間市場需要を高めている中で、原料の生産を中心とした北部や銀元の浸透が弱かった東部では信頼されてきた銅銭に転換したが、特産物の販売を主にした南部地域では馴染んできた銀元が選択された。そのように地域ごとに貨幣使用の差異傾向が出て来た。但し、南部では銅銭使用が全くされなかったということではなかった。

道光期以降、銅銭の提供がなくなった状態で貨幣需要が極めて高く求めた。民間市場で銀両、銀元、銅銭、紙幣（銀票、錢票）という複雑な状況の下で、各地域内で清代に亘って使用されてきた貨幣がそれぞれの地域に選択されたと考えられる。銅銭を主に使用した東部・北部では福州港の貿易繁栄に伴い、光緒初期まで外国銀元の浸透が高めた。

土地売券に見られる貨幣使用の内容から見ても、貨幣地租は少なかった。経営タイプの地主が存在したが、完全に商工業に転換した資本家が見られなかった。清政府の土地政策に従って経営する土地所有者が主流であった。その階層は下層農民との交易が多く存在したことを考慮すれば、銅銭使用の可能性がもっと高かったと予想できる。

銀錢比価を固定されたことについて、解明できないが、少なくとも親族間の

土地所有権や「一田二主」現象との関連があるのではないかと思われる。新しい土地売券の発見に伴い、調べて行きたい。また、西部の土地売券のデータが全くなかったので、福建各地域の経済発展と貨幣流通について分析したと言いたいのであるが、今後の課題として期待したい。

参 考 文 献

中 文

1. 福建師範大学歴史系編『明清福建経済契約文書選輯』人民出版社、1997年。
2. 傅衣凌『明清社会経済史論文集』人民出版社、1982年。
『傅衣凌治史五十年論文』厦門大学出版社、1989年版。
『明清時代商人及び商業資本』人民出版社、1954年。
『明清社会経済変遷論』人民出版社、1989年。
『明清時代永安農村の社会経済関係——以黄歷郷発現各項契約為根拠の一箇研究』
『明清農村社会経済』（北京三聯書店、1961年）。
3. 楊国楨「試論清代閩北民間の土地売買」『中国史研究』1981年第1期。
編「清代閩北土地文書選編（一）、（二）、（三）」『中国社会経済史研究』1981年第1-3期。
主編「閩南契約文書綜録」『中国社会経済史研究』1990年増刊。
『明清土地契約文書研究』人民出版社、1988年。
4. 汪征魯『福建史綱』福建人民出版社、2003年。
5. 曾 玲『福建手工業發展史』厦門大学出版社、1995年。
6. 陳景盛『福建人口史論考』福建人民出版社、1991年。
7. 陳支平「明清福建貨幣地租質論」『中国社会経済史研究』1990年第1期。
8. 陳 鏗「明清福建農村市場試探」『中国社会経済史研究』1986年第4期。
『明清福建人口の經濟性遷移』『人口与經濟』1985年第2期。
9. 曹樹基『中国人口史（清時期）』復旦大学出版社、2001年。
10. 何炳棣『1368-1953年中国人口研究』葛劍雄訳、上海古籍出版社、1989年版。
11. 王業鍵「十八世紀福建の食糧供需与糧価分析」『中国経済史研究』1987年第2期。
13. 林 楓「試析清末福建市場商品流通額」『中国社会経済史研究』1998年第1期。
14. 庄国土「論17-19世紀閩南海商主導海外華商网络的原因」『東南学述』2001年第3期。
15. 厦門大学歴史研究所中国社会経済史研究室著『福建經濟發展簡史』厦門大学出版社、1989年。

16. 周玉英『明清時期福建經濟契約文書研究』遠方出版社、1999年。
17. 梁方仲『中国歴代戸口、田地、田賦統計』上海人民出版社、1980年版。
18. 福建省錢幣学会編著『福建貨幣史略』北京中華書局、2001年。
19. 戴一峰『華僑華人歴史研究』1988年第2期。
20. 嚴中平編著『清代雲南銅政考』中華書局出版、1957年。
編『中国近代經濟史統計資料選輯』科学出版社、1974年。
21. 李文治『中国近代農業史史料』第一輯、生活・讀書・新知三聯書店、1957年10-12月。
22. 范金明「明清時期江南与福建広東的經濟關係」2004 - 4 - 11。
中国經濟史論壇 <http://www.guoxue.com/>。
23. 『福建通志』（乾隆29年・道光9年・民国五十一総巻）
24. 楊焯達「清代中期（公元1726-1855）滇東北的銅業開發と環境変遷」『中国史研究』2004年第3期。
25. 朱淑媛「清代乾隆前期における琉球銅について」『琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集第五回』教育委員会、1999年10月。

和 文

1. 三木 聡『明清福建農村社会の研究』北海道大学図書刊行会、2002年。
2. 山本 進『清代の市場構造と經濟政策』名古屋大学出版会、2002年。
3. 岸本美緒『清代中国の物価と經濟変動』研文出版、1997年。
4. 黒田明伸『中華帝国の構造と世界經濟』名古屋大学出版会、1994年。
『貨幣システムの世界史』岩波書店、2003年。
5. 斉藤史範「明清時代福建の墟市について」『山根教授退休記念明代史論叢』（下巻）汲古書院、1990年。
6. 村上 衛「清末厦門における交易構造の変動」『史学雑誌』109-3、2000年。
7. 陳 盛韶『問俗録』訳注者（小島晋治・上田信・栗原純）平凡社、1988年。
8. 東亜同文会著作者兼発行者『支那省別全誌』（第14巻、第18巻）1920年。
9. 岩生成一「近世日中貿易数量的考察」『史学雑誌』62 - 11、1953年。
10. 永積洋子『唐船輸出入品数量一覽 1637-1833』創文社、1987年。
11. 李 紅 梅「清代における福建省の貨幣使用実態——土地売券類を中心として」『松山大学論集』18-3、2006年。